

燃田子菜

創立五十年誌
(二)

創立五十年誌「燃ゆる柴」(二)

目次

教会五十年のあゆみ	1
榎本牧師の八十年史	35
写真で見る教会史	59
各会のあゆみ	83
教会年表	91
信徒及び求道者並びに関係者名簿	107
結ばれた方々の名簿	113
さきに召天された方々の名簿	117
あとがき	119
集案案内	120

教会五十年のあゆみ

八幡前田教会五十年のあゆみ

編集委員会

一 はじめに

八幡前田教会の歴史を考えると、榎本先生を抜きにしては語ることができない。実に榎本先生の御生涯と共に、教会五〇年の歩みが刻まれてきた。否、むしろそれは神様が先生を選び、召し、この八幡の地に神の福音を伝える器として用い、導かれた歴史であるというべきであろう。

榎本先生は、明治四二年に愛知県豊川市で、七人兄弟の三男として生れた。家は代々浄土真宗の寺総代をしている家柄であった。

昭和二年に戸畑市（当時）にあった明治専門学校（現国立九州工業大学）に入学された。友人達がみな東京方面へ上る中で、一人西の方へ下ってきたわけであるが、丁度、ルツがはからずもボアズの畑に足を踏み入れたことにより、ボアズと結ばれることになったと同じように、このことが主の福音にあずかる機会となった。主の不思議な摂理を思い、感謝するものである。

まず、クリスチャンであった学校の奥貢教授と接し、教授



城さん御夫妻

を通して、高見町八幡製鉄社宅の城さん宅の家庭集会（昭和五年折滝鶴治郎牧師によって始められた）に導かれた。そこで神の聖言に心を捉えられ、月一回の家庭集会では満足できず、福岡市浜の町にあった福岡基督伝道館（現大濠公園教会）の礼拝に通うようになった。

昭和六年に学校を卒業、当時は不景気で就職口がなく、そのまま研究室に残ってアルミニウムと石炭液化の研究を続けておられたが、昭和七年の新年聖会において、が然主の十字架を示され、神の愛に満たされた。そして、こんなに愛して下さる方のために自分の命を投げ出して応えて往きたいと、献身の決意をなされた。

この時の主との出会いが、生涯を一貫して導いた原体験ではなかったかと思う。六〇年経った今でも、救われた時のことを話す先生は、昨日のような感激をもって語られるのであ

る。

先生はその足で下宿の荷物を整理し、折滝鶴治郎牧師に献身を申し出、修養生となった。そこで八年間、主に従うさまざまな訓練を受け、神の器として備えられていった。(修養生時代の様子は、「ぶどうの木」第九号牧師館訪問記(二)に詳しい)

一方、八幡の地では城さん宅の家庭集會が続けられていたが、「月一回では満たされない。何とか八幡で礼拝を守りたい」との飢え渴きが起こり、昭和一三年頃、取りあえず河本商店の二階八畳二間を集會所として開放してもらい、毎日曜日、福岡から折滝師、榎本先生、野村兄が交代で来て、日曜学校、礼拝、伝道会を行っていた。当時は福岡まで汽車で二時間ばかりかかっていたから、集會が終わって家に帰り着くのは、夜の一二時を過ぎていたと思う。

その後も、専任者をとの祈りが積まれた。そして昭和一四年、神の時は満ちて、榎本先生が専任牧師として遣わされることになった。

このようにして、八幡前田教会の前身である八幡基督伝道館が誕生し、その第一歩が記されることになったのである。

二 教会設立から戦災まで (河本商店二階時代)

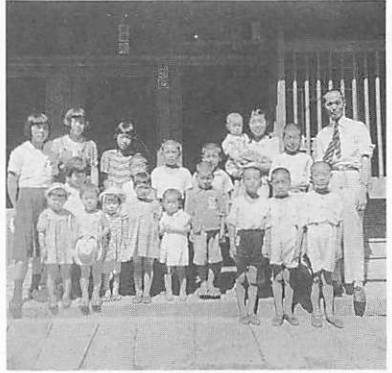
〈着任当時の様子〉

先生が専任牧師として着任したのは、冬の気配を見せ始めた十一月三日であった。この時、先生は満三〇歳、奇しくもイエス様が公けの伝道生涯に入られた歳と同じである。

先生が荷物を手に八幡駅に降り立った時、足がガタガタと震えたという。これから遣わされるところは、人生経験豊かな年配の人ばかり、しかも今までと違って自分でやらねばならない、自分の無力さを考えると、足のすくむ思いがしたのは無理もないことであった。

しかし、そこで主を見上げた時、「今より我は主なり、我行わば誰れかこれを止むることを得んや」(イザヤ四三・一二三)の聖言が与えられ、心の恐れは去り、この八幡に来たのは私がかたくて来たのではない、主が行けと言われたので来た、この主が共にいて下さるから大丈夫だ……と大きな平安と信仰に導かれたと述懐される。この聖言は、先生の生涯のメッセージとなった。

河本小太郎兄が先生のために用意された居宅は、現在の八幡駅に近い大正町という所にあった。新築の建物で、一階が河本商店の工場兼倉庫、二階が従業員社宅になっていて、そ



河本商店前（日曜学校生徒）二階が集会所

のことである。

教会は、それまで集会所としていた長者町（現在地）の河本商店の二階にあり、階段のところ、「八幡基督伝道館」という看板が掲げられた。

当時の先生は、長身、細身の体つきで、まだ眼鏡はかけていなかった。頭は丸坊主で、羽織はかまに下駄ばき、手に聖書を包んだ風呂敷包みといういでたちで、大正町から長者町まで通いながら、朝六時からの早天祈禱会、日曜礼拝、伝道会などの御用に当っておられた。

教会設立時の礼拝出席者は、河本兄姉、後藤老人、城夫人、吉永姉、南部姉、新見姉、それに高橋兄、長尾兄など河本商店の従業員数名であった。

の一戸を牧師館として提供されたものであった。畳の香りも新しく、河本かつ姉が炊事道具からイリコに至るまで、すべて心のこもった用意を下さっており、独身の先生は大いに感激された

〈基督伝道隊について〉

ここで、八幡前田教会の信仰の基盤ともいえるべき「基督伝道隊」とその信仰についてふれてみたい。

基督伝道隊は、柘植不知人師が主の導きに従って起こした群（活水の群と称する）である。



柘植不知人師

柘植師は聖書の聖霊のパプテスマを受け、大正初期から昭和初期にかけて福音伝道を行い、著しい魂の救いと神癒の栄

光が現わされたことにより、全国各地に伝道館が設立された。福岡基督伝道館もそのひとつで、栢植師の下（活水学院）で修養を受けた折滝鶴治郎師の開拓伝道により設立されたものであり、八幡基督伝道館もその流れをくむものである。

その信仰は、当時の基督伝道隊教会総則及規定によれば、「我等は特殊の信仰箇条を有せず、聖書全部を信奉し、之を実験体得するをもつて本旨とす。専ら宣伝せんとする所は、キリストの十字架と復活及び聖霊の降臨これなり。その中に一切のものを包含するものなるを信ず。もとよりキリストの再臨とその結果は聖書全巻の帰結といふべきも、地上にて実験する所は上記二大恩寵なればなり」としている。その強調するところは、罪の問題、生活の問題、病の問題、死の問題、この人生四大問題の聖書による解決であり、その歩みは神を第一とし、人間の計画によらず、神の御旨に従うことにある。教会の財政については、「本教会においては、総て信仰によりて一切の供給を神に仰ぐのほか、何等の募金活動及び方法を取らず、『使徒達の足元におけり』との意味にて献ぐるものほか、人より金品受けざるべし。

教役者は一切俸給制度を設けず、これ働きの報酬を受くるは神の国の制度にあらざればなり。奉仕の特権に与る事は神

の恩恵にして、福音によりて生活せしめられることは、神の憐みによる」として、月定献金を行わず、恵みに感じて捧ぐる自由献金によつてゐる。

〈結婚〉

さて、教会が設立されて数か月が経ち、先生の働きも軌道に乗り始めた頃、折滝牧師から牧会をする者は一人ではないといけないと勧められたので、結婚することになった。

折滝牧師から紹介されたのは、福岡基督伝道館の末永百合子姉であった。末永姉は、姫路福音教会牧師故末永弘海先生のいとこに当る。長崎県五島の出身で、郷里で小学校教師をしていたが、キリスト教の信仰を守りたいとの願いから、福岡の伯母（末永師の母堂）を頼つて来ていた。

お二人の結婚は、誠に聖書的であった。ひたすら主の導きを求め、聖言に従われた。特に百合子姉の信仰の戦いは大きなものがあつたが、「わが義人は信仰によりて生くべし、もししりぞかば、わが魂これを喜びとせし」（ヘブル一〇・三八）の聖言が与えられて決心された。

結婚式は昭和一五年一月五日、福岡基督伝道館において、折滝牧師の司式で行われた。

式が終ったその足で八幡に帰り、翌朝の早天祈禱会にお二人で出られた。文字通り新婚生活は信仰生活の第一歩であった。その姿勢は、今日に至るまで変ることがなかった。

昭和一六年に俵雄さん、一七年に和義さん、一九年に咲子さん、二二年に豊さん、二二年に恵さん、二六年に誠さんが生れた。

〈戦時下の伝道〉

当時の世相は、昭和一四年に第二次世界大戦が始まり、日本はまだ参戦していなかったが、軍部が台頭し、国家主義、国粹主義の思想が盛んになっていた。昭和一六年に陸軍大將東条英機が政権を握るや、世を上げて戦争体制へと進んでいき、思想統制などが行われるようになった。そして同年二月、真珠湾奇襲攻撃が行われ、太平洋戦争が開戦した。

そのような状況下の昭和一五年二月に、基督伝道隊八幡教会設立願を提出したが、理由もなく却下され、無認可のまま集会は続けられた。

その後、政府の思想統制の一環として、宗教団体が施行されたため、キリスト教界も当局の要望に応じて、各個教会の信仰と伝統を重んじた形で日本基督教団が組織された。

このため、昭和一六年に、八幡基督伝道館は日本基督教団八幡長者町伝道所となった。

戦争がひどくなるにつれて、思想統制も厳しくなった。特にキリスト教は敵性宗教であり、現人神あらひとがみである天皇を否定するものとして監視され、投獄される牧師も出るようになった。榎本先生もたびたび特高に呼び出されて、天皇について尋問されたり、私服の刑事が信者を装って、説教をメモするということもあったが、主は守って下さり、集会を止めるということにはならなかった。

日本の戦況が悪くなるに従ってインフレがひどくなり、物資が不足して食糧配給も少くなった。「欲しがりません、勝つまでは」という言葉が宣伝され、国民は遅配欠配四〇日の耐乏生活を強いられた。

育ち盛りの子供をかかえた先生御一家の生活も、随分厳しいものであったと想像される。(極度に食糧に不足した時に生れた咲子さんは未熟児であった) そういう中でも、先生は収入を得るために職を求めようとはせず、献身者は殉教者であると、一切を主にゆだねて従われた。

主はその信頼に応え、いよいよ食べるものが無くなると、不思議なように何処からか与えて下さり、一度も欠食したこ

とはないという。「桶の粉は尽きず、瓶の油は絶えざりき」
（列王上一七・一六）の聖言を現実のものとして、経験されたのである。

新年聖会が初めて開かれたのは、昭和一七年である。当時は五日間一五回の集会であった。戦災による中断まで続けられた。

昭和一六年、西南女学院の原院長からの要請により、学生に対する伝道の門戸が開かれ、聖書講義に行かれるようになった。ここから、岩隈姉、林まり子姉、服部姉、中村姉らが教会に導かれるようになった。

戦時下で牧師が次々と徴用されていく中で、先生は学校に出ているということで、徴用を免れることができた。ここにも、主の時機を得た助けと導きがあったのである。

〈戦災〉

戦争もますます激しくなり、日本の敗戦が色濃くなった昭和二〇年八月八日、八幡市は大空襲を受けた。巨大なB29が大挙襲来し、空も暗くなったという。地鳴りのようなものすごい爆音と共に、バリバリと音を立てながら焼夷弾が雨のように落ちてきて、またたく間にあたりは火の海となった。

家族は一時防空壕に入っていたが、危険を感じて汽車線路の土手の所まで避難した。消火作業で一足遅れた先生は、「あなたが火の中を行くとき、焼かれることもなく、炎もあなたに燃えつくことがない」（イザヤ四三・二）の聖言を握って祈りながら、スコップをもってステップして火の海の中を突き抜けたのであった。

八幡は中央町から陣山に至るまで、一面焼け野原であった。教会も貴重な記録も焼失した。

焼跡に行ってみると、焼死体がゴロゴロころがっており、その中には若い兵隊もいたという。防空壕に入った人達は全滅であった。主はそういう中から先生御一家を救い出して下さったのである。

河本御一家をはじめ信者の皆さんも無事であったが、皆着のみ着のままであった。

先生は焼跡にたたずみ「いつの日か、またこの所で聖名を崇める礼拝を守らせ給え」と祈った。そして、初代教会のクリスチャンが各地に散らされたように、東に西にとそれぞれ生活の場を求めて散っていった。



昭和20年 戦災直後の前田地区（八幡市史より）

三 戦後の復興期（昭和二〇年代）

〈献堂〉

教会と牧師館を焼失した先生は、家族を奥様の郷里五島へ疎開させ、御自身は、小倉にあった旧陸軍将校の宿舎を西南女学院が貸してくれたので、そこに住むことになった。そして西南の教え子や高見社宅、元八幡市長の守田さん宅、友の会などで集会を持っていた。この時代に救われたのが、柴原姉、島崎姉、中原姉、大田姉、森岡姉などである。戦災一年後に、河本小太郎兄が現在の地に家を建てたので、そこで礼拝を守るようになった。

昭和二二年一月、今の小倉北区井堀にある西南女学院の希みが丘宿舎に入れるようになったので、家族を呼び寄せ、一緒に住むようになった。

同じ年のある日、河本兄が「小さいマッチ箱のような家ですが、主の御用に用いていただけますでしょうか」と、使徒達の足元におくように、謙虚に会堂を捧げられた。

当時は戦災住宅しか建てられない時代で、資材のない中で苦勞して資材を集めて建てたものであった。

付近にはまだ建物は少なく、戦災地にポツンと建てて目立つ二階建の建物であった。



昭和24年 新会堂（階下牧師館）



昭和26年 会堂玄関前（牧師家族）

献堂式は昭和二二年九月七日（日）に行われた。
河本小太郎兄が読んだ献堂の辞は、福音にあずかった喜びにあふれ、この建物は小さいが、福音が地の果まで宣べ伝えられるため用いていただきたいとの祈りと感謝に満ちたものであった。

一階が牧師館で、二階に会堂があり、三間と四間半で十三・五坪の広さであった。会堂の玄関に上るために、電車通り側に五、六段のコンクリートの階段がつけられており、会堂に

は、ベンチ一〇脚が二列に並んでいた。

〈牧会専念〉

先生は、思いがけない時に新しい会堂が与えられ、また主がああ焼跡で祈った祈りにこのようにこたえて下さったことを覚え、感激と感謝で胸のつまる思いであった。

これまで伝道一本でいきたいと願って、主がこんなに備えて下さったのだから、今こそ主に従おうと牧会専念を決意された。

そして、昭和一六年から続けていた西南女学院の非常勤講師を辞めた。自ら収入の道を断つ、文字通りの背水の陣であった。先生三八歳、長男の俣雄さんはまだ幼い六歳の時である。

世の中は戦後の荒廃から立ち直っておらず、不景気が続き、信者の数は少なかった。そういう中での牧会専念であった。

「まず、神の国と神の義とを求めよ」（マタイ六・三三）

自分のことよりもまず神に従う、それが自分の使命であり、そのためのあかし人である。自分は神様に身を献げたのだから、神様が責任を持って下さる。神様の手に握られているのだから、使命が終れば召されるだろう、死ぬのなら、死ねば良いのだと献身の壇を築いて、主に従われたのである。



教会の看板と前庭（門柱も垣も無し）

新しく取り付けられ

た看板には「日本基督
教団八幡前田教会」と
書かれていた。

九月九日から早天祈
禱会が再開され、路傍
伝道も行われるようにな
った。

一月二三日の礼拝
で週報「みぎわ」第一
号が河本実兄、野村末
義兄によって発行され

た。
中断していた新年聖会も昭和二三年から開かれるようにな
り、また同年六月一〇日から一三日まで、姫路福音教会末永
弘海師を招いて教会新築記念特別集会が開かれた。

献堂式があった次の日曜日の礼拝に、今は亡き丸橋幸市兄
が、初めて出席された。同兄が会堂第一号の信者となった。
昭和二三年の洗礼式には九人の方がバプテマスを受けた。

〈牧師館の状況〉

ここで、牧会に専念された後の牧師館の様子について、ふ
れてみたい。

戦後の混乱と食糧難の時代の中で、育ち盛りの子供さんを
かかえて、その苦労は並大抵ではなかった。百合子先生はイ
モの買出しにも行かれた。そういう中で、主はエリヤをケリ
テ川でカラスをもつて養われたように、見も知らぬアメリカ
の方から食料品や衣類などが送られるなどして養って下さっ
た。主の守りの中にあつたから、牧師館からはいつも笑いの
と主を讚美する声が絶えなかった。

二人の幼い子を天国に送ったことも、先生御夫妻にとって
忘れることのできない出来事であつた。

昭和二二年に三男豊さんが自家中毒のために亡くなった。
生後六ヶ月のかわいい盛りであつた。次いで同年一月に四
男恵さんが生まれたが、乳を飲んでもすぐ吐き出し、手を尽
したが、一三日で天国に召された。腸閉塞であつた。同じ年
に二人の愛する子供が天に召されたことは、御夫妻にとつて
大きな心の痛みであつたが、殊に母親である百合子先生には
大きな試みであつた。あのことが悪かつたのではないか、あ、
すれば……こうすれば助かつたのではないかと、自分を責め

る思いと、こんな形で召しなされるなら、何故神様は与えなされたか、こんな苦しい思いをさせるくらいなら与えねばよいのに……そんな思いで随分苦しみました。

しかし「万物は神からいで、神によって成り、神に帰する」(ローマ一・三六)の聖言により、神様の許しなくしては何事も起こらないこと、その神様の前に、自分が主になっていしたこと、どんな取扱いを受けても神様には従うべきであることを主が懇ろに教え悟らせて下さったという。

このようにして、神様は先生御夫妻をいろいろな中を通して訓練し、神の器として整えていった。そしてそのひとつひとつが講壇から語られ、私達の信仰の糧となり、命となっていくた。

信者にとって、よき牧者を与えられることは誠に幸いなこととであり、神様の最高の賜物であると、感謝するほかない。

「信者は牧師館のお茶を飲む回数に比例して恵まれる」とは、八幡前田教会の格言である。

今日まで、どれだけ多くの方々がいろいろな悩みに頭をうなだれて牧師館を訪れ、その戸を叩いたかわからない。居間兼食堂兼客間である四畳の間の堀ゴタツに暖かく迎え入れられ、奥様が入れて下さったお茶をいただきながら、お話しを



昭和29年 牧師ご家族

満たされていった。

戦後しばらくは百合子先生が体調を崩されて、床に臥すことが多くなった。そういう時、榎本先生は子供の世話から炊事、洗濯までなさった。先生がいつ御用の準備をされているか、その姿を誰も見たことがない。それくらいお忙しかった。

そこで、ある方がそのことを聞いてみた。すると先生は「一日二四時間が準備の時です」と答えられたという。

聞いた。聞いている内にだんだん主の愛がわかり、主に信頼することができ、表情も明るくなって帰っていった。

土曜日の会堂掃除のあとは、青年達が牧師館で夕食をいただいていた。青年達はその肉の糧だけでなく、霊の糧もい

先生は仕事をなさっておられる中で祈り、絶えず主との交わりをもっておられた。事ごとに主の導きを求め、それに従っておられた。そこで主から教えられ、それが説教の中であかしされた。先生にとって御用は、特別の場ではなく、自らを聖言の実験台として、このように従ったらこのようにこたえて下さった、主は今も生きておられるというあかしの場であった。自ら体験したことであるから力があつた。

〈会堂と集会の様子〉

会堂は物資の乏しい時に建てられたので、下の牧師館とは板一枚であつた。このため声もゴミも素通りで、上でも下でもいろいろなエピソードが生まれた。

会堂の屋根は鉄板葺でまもなく腐食して雨もりがするようになり、トタン葺に張替えられたが、夏は暑く、冬は寒かつた。冬の早天祈禱会は、火鉢と七輪を囲んで行われていた。それでも靈に燃えて寒さを感じなかつたという。

後に石炭ストーブが与えられて暖かくなつたが、煙突掃除などいろいろな苦勞があつたようである。その後、ガスストーブや石油ストーブが備えられ、昭和四四年頃ヒートポンプ式の冷暖房機が設置されて、快適に礼拝が守れるようになった。



昭和29年 会堂内（結婚式準備）



昭和34年 石炭ストーブ時代（愛さん会）

戦後、新憲法が公布されて民主主義が盛んに言われ出し、昭和二五年頃は、民主主義の根底になっているキリスト教が全国的に関心を得た時代で、ブームであつた。しかし朝鮮戦争が始まり、日本の景気が回復するに従い、潮が引くように鎮静化していった。当教会にも色々な人が来たが、また去つていったようである。

そういう中で昭和二五年に熊畑恒男兄、広瀬（現池田）姉たち、昭和二六年に、高木敏夫兄、伊規須太郎兄（現戸畑教会牧師）、東俊郎兄（現八尾教会牧師）、東泰子姉（現伊規須師夫人）たちが相前後して求道してくるようになった。そして、これらの兄弟が各集会に励み、会堂掃除や日曜学校、ク

リスマスなどの御用に当るようになり、教会は活発化してきてた。

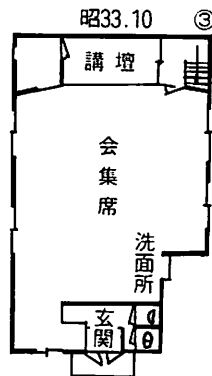
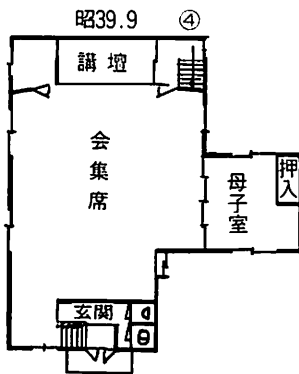
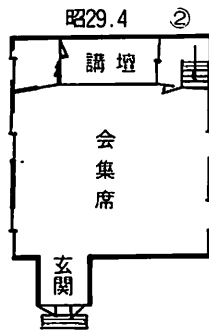
昭和二十七年と二十八年の二回にわたって、藤村壮七先生が聖会を開いて下さった。御霊の働き著しく、一同は恵みの高みに上げられた。

四 教会の成長期（昭和三〇年代～四〇年代） （会堂の増築）

主の祝福で信者の数が増えるに従い、会堂が狭くなってきた。このため昭和二十九年四月に西側へ一間拡張した。講壇の横にできた一坪ほどの祈禱室は、事務室となり、日曜学校の教室となり、献身者室となり、クリスマスの楽屋ともなって、多様な用途を持つ重宝な部屋であった。

昭和三十三年一〇月、南側（玄関）へ約二間増築し、旧玄関を撤去して階段を玄関内に取り込んで右手にトイレ、正面下部に下駄箱、左に階段を上った所にスリッパ棚が設けられ、受付机が置かれた。

トイレはそれまで牧師館と共用であったので、下まで降りて行かねばならず、便槽も小さかったため、たびたびあふれたとのことである。これでトイレの苦勞は解消した。



昭和三九年九月、この頃二世三世が増えて子供の声が賑かになったので、東側に四坪、教会の客間兼母子室を増築した。この和室もまた利用度の高い部屋であった。

会堂の増築と共に、その都度階下の牧師館も広くなり、それまでの御不自由が少しずつ解消されていった。

このように教会の成長に合わせるようにして、神様は器も大きくして下さった。

旧会堂の床板は、増築部分の区分がはっきりしていた。最初の床は松板で、西側はひのき板のニス塗り、南側もひのき板であったが、出入口であるためニスが剥げて赤黒くなっていった。ベンチも三種類あった。

増築されても決して広いとはいえず、天井も低くてお世辞にも立派な建物とはいえなかったが、とても暖か味のある、誰でも気楽に入れる、そんな会堂だった。床板一枚一枚、心をこめて雑布がけをした思い出がある。このベンチに座って神の言を聞き、感激の涙を流したこともある。ここで多くの方が結婚式を行い、クリスチャンホームを築かれた。また数多くの告別式が行われ、親しき聖徒を天国へ送った。いろいろな思い出と神の恵みが隅々にしみ込んでいる……。そんな会堂だった。

〈集会の広がり〉

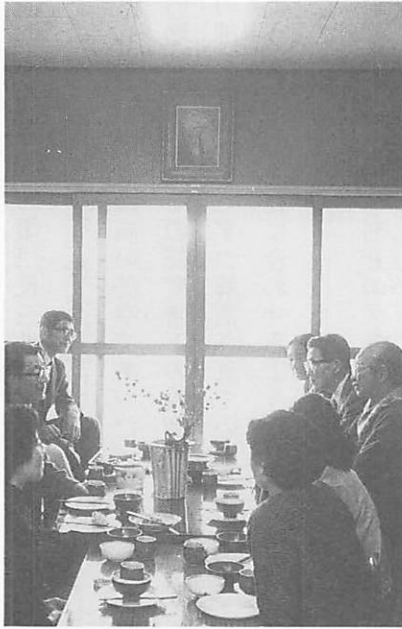
信徒が増えてくるに従い、家庭集会も開かれるようになった。鷺田（二八年）、東郷（二八年）、戸畑（三三年）、永大丸（三五年）、海老津（四三年）などである。

家庭の事情等により、数年で中止するところもあったが、その中で戸畑家庭集会については、戸畑教会へと発展していく。

初めは沢見町の加藤雷典兄宅で開かれていたが、昭和三四年に大阪転勤となった。この時、兄が三六町にある宅地を教会に捧げられたので、昭和三五年に戸畑伝道所を建築し（九月四日献堂感謝会）、伊規須兄弟が入居され、榎本先生が毎週木曜日に集会を持つようになった。

その後、昭和四八年に伊規須兄と泰子姉が献身され（三月四日献身式）、集会は伊規須兄が受け持ち、日曜学校も開かれるようになった。そして昭和五一年一〇月、伊規須兄は御用に専念すべく新日本製鉄を退職して開拓伝道を開始されるようになり、昭和六一年四月、戸畑教会となった。

大阪集会が月一回定期的に開かれるようになったのは、昭和四三年六月一八日からである。これは前田教会から大阪方面へ転出した兄弟達が他教会の神学的信仰では満たされず、



海老津家庭集会



昭和59年 大阪集会

霊的飢餓状態にあったため、先生が丸山兄姉宅で時々集会を行っていたが、求めの切なるにより、定期的にくようになったものである。ここからも救われる魂が起こされていった。

海老津集会は昭和四三年から開始された。これは正野サカエ姉が自宅で集会を

持つことを願い、永年祈ってきたが、漸く商売をやめ、海老津に家を新築したので、集会を開くことができた。最初は榎本先生が月一回御用をしていたが、要望も強くなり、野村兄が毎週水曜日に行かれるようになった。以来二〇年間、主の憐れみにより続けさせていただいている。

第一礼拝は折尾女子商業高校生のために七時四〇分から行われていた。

これは榎本先生が聖書講義に行っておられた関係で多数の生徒が礼拝に出席するようになったため、昭和三二年四月から大人の礼拝とは別に行うようになったものである。

一〇時の礼拝に、仕事の関係などで出られない人も出席できて、多い時は一〇〇人ぐらいの出席があった。

榎本先生と高木兄が交代で御用に当っておられた。

この中から高橋姉、石田姉、内海姉、植木姉、中原姉、真島姉、谷口姉、下川姉、花倉姉たちが救いに導かれた。第一礼拝は会堂改築に伴い、昭和四九年四月をもって、一七年間の幕を閉じた。その後、折尾女子商業の生徒は日曜学校の女子高校クラスに出席するようになった。

木曜会は祈禱会などの夜の集会に出にくい方々のために、昭和四二年三月二日から開かれるようになった。先生は講壇

からではなく、下に降りて御用をされる。昔、弟子達がイエス様をとり囲んでお話しを聞いたように、そんな雰囲気の中で聖言を味わい、魂の養いを受けている。

八幡前田教会は先にも述べたとおり純福音を掲げており、聖書を神の言と信じ、人間的解釈をせず、御霊の啓示、導きに従うことを本旨とする。このため榎本先生は専ら祈りと聖書を読むことを勧奨し、他の信仰書は勧めない。「パリサイ人のパン種を警戒せよ」と主の聖言にあるように他の信仰が混じることを警戒された。(一時期、幕屋の群がキリスト教界を揺がしたが、先生は少しも動かなかった)。



折 滝 師

そういうことで、先生は講壇を大事にされ、他の流れを汲む講師を招いて集会をすることはなさらなかった。ただ活水の群の先生が時々来て、特別集会を開くことがあった。昭和三四年六月に末永弘海師、四四年一〇月及び四五年五月に松岡忠治郎師がそれぞれ特別集会の講師として来て下さった。



伊規須 兄



野村 兄



藤掛 兄



高木 兄

昭和四二年四月に折滝鶴治郎牧師が召天された。大濠公園教会が無牧となったため、榎本先生がとりあえず兼牧されることになった。礼拝の御用が大濠公園教会と交互になったため、先生がおられない時の礼拝は、野村兄、高木兄、伊規須

兄また大濠公園教会の信徒藤掛邦夫兄が御用に当たり、また榎本先生の説教テープによる礼拝を守ったこともある。

大濠公園教会の後任牧師の選任について、榎本先生も主の導きを求め、いろいろ労をとられたけれども適任者がおらず、兼牧のまま今日に至っている。

〈教団離脱〉

昭和四八年に教団を離脱したことも、教会の歴史の中で大きな出来事であった。戦前、戦時政策の一環として、日本基督教団が組織され、前田教会もこれに加入していた。

教団の教憲教規が定められ、同一信仰であることが求められた。また、教団は会議制で、代議員による多数決で決められることになっていた。聖書の示すところは、民主的であるより神主的でなければならぬ。代議員は聖霊に満されて、協議ではなく、主の聖言を求め、御旨に従うことがすべてに優先するはずである。

しかし教団は社会革新を求めるようになり、人々の要望に応えなければならぬと、だんだん聖書を離れ、この世の働きに傾いていった。

榎本先生は、協議や運動をしている間に多くの魂が亡びて

いつている、祈って主の憐れみを求め、聖霊により一人でも救っていただくことが必要である、聖書に立つ信仰でなければならぬと、三〇年にわたって訴え、あかししてきたけれども、教団の姿勢は変らなかつた。かえって前田教会は非協力であると排斥されるようになった。先生はこのために祈り、教団に対する使命は終つたと判断、日本基督教団との包括関係を廃止することとし、昭和四八年四月一日に同教団を離脱した。そして本来の使命を果たすべく、宗教法人基督伝道隊八幡前田教会として新しく出発したのである。大濠公園教会もこれに同調し、昭和六一年に設立された戸畑教会も加入した。

〈教会誌「ぶどうの木」の発行〉

教会誌「ぶどうの木」は、昭和四〇年五月に第一号が発行された。それより前にサフラン会（青年会）が会誌を発行したのが発展して、教会誌となったものである。名前は、御霊により信仰の実、愛の実、讚美の実が多く結ばれ、教会誌にあかしされるようにとの願いをもって、ヨハネ一五章から「ぶどうの木」と命名された。編集はサフラン会が担当した。

第一号は専門のタイプ印刷に頼んだが、費用の問題もあり、

第二号から第五号までサフラン会がガリ版切りやタイプ打ちなどをして手作りの会誌を作った。いささか読みづらい面もあるが、当時の青年達の苦勞がしのばれて貴重である。回を重ねるに従って投稿も多くなり、その輪も広がっていった。編集の方もカットを入れて読みやすくしたり、取材班シリーズを入れるなど内容も充実していった。

新会堂が与えられた時発行した第一〇号は、旧会堂特集号となった。

今読みかえしてみると、その時その時の主の恵みが新たによみがえり、文字通り感謝のエベネゼルの石塚（サムエル上七・一二）となっている。またこれは教会のあゆみの記録でもあり、教会誌は教会史となった。このたびの五〇年誌を編さんするうえでも、貴重な資料であった。現在までに、一七号が発行されている。

〈納骨堂建設〉

昭和四〇年に念願の納骨堂が建設されたことも、神の恵みであった。これまで信徒が召されても、その遺骨は家代々の墓や納骨堂に入れるほかなく、教会の納骨堂が欲しいという切なる願いが起こり、永年の祈りであった。しかし、建設地

の問題などがあって、なかなか実現できなかった。

幸い東郷教会との合同建設の話が持ち上り、東郷教会が教会敷地の一部を提供し、建設費を前田教会が負担するということで協議が成立した。このため指定献金が行われ、また納骨堂を希望する人は加入料として一万五千元（現在三万円）を負担することになった。

定礎式は昭和四〇年三月二一日に行われ、八月八日献堂式が東郷教会の現地で行われた。私達イエス様を信じる者は天国に行くのであるから、遺骨についてはそれほど重要視しない、というものの、やはり遺族としてはあいまいにすることも出来ず、心に残っていた問題であった。このようにして教会の納骨堂が与えられたことにより、ただ遺骨の整理ができるというだけでなく、天国の望みが強くされ、安心して信仰生活ができること、またお互いが神の家族であるという意識が強められたということにおいて意義は大きく、主に感謝するものである。

現在四〇家族が加入しており、毎年、墓前礼拝が行われている。



納骨堂（墓前礼拝）

〈聖徒の召天〉

教会に信徒の群が徐々に加えられていく一方で、共に礼拝を守ってきた方々を天国へ送ってきた。「聖徒の死は、その御前において尊い」（詩一一六・一五）とあるように、救い

にあずかり、使命が与えられ、走るべき行程を走り尽し、私達により模範を残して下さった方々を忘れてはならない。

特に、戦前戦後を通して教会の礎となつて下さった河本小太郎兄の生涯は、永く記念されねばならないと思う。

小太郎兄は、クリスチャンであつたかつ奥様と結婚されたことを通して、折滝先生の家庭集会（城さん宅）に導かれ、昭和七年に主の救いにあずかつて以来、すでに記したように、自宅を開放して家庭集会を開き、さらに榎本先生を招いて八幡基督伝道館を設立、戦災により全焼した後はいち早く会堂を建築して献堂された。小太郎兄の働きにより、私達はこの尊い福音にあずかることができ、安心して礼拝を守り、聖言を聞くことができたのであり、どんなに感謝しても感謝しきれないものがある。

しかし尊いのは、その働きもさることながら、兄の御生涯、信仰の歩みそのものではないだろうか。

まず、神を神とし、神第一の姿勢を貫かれたことである。救われるまではタバコを吸つておられたが、聖霊の宮をニコチンで汚しては申し訳ないと直ちにやめ、お酒も断られた由。そればかりでなく、中央町で食料品店を営み、酒販売で高利益を得ておられたのに、きっぱりと酒類の取扱いをやめ、サ



昭和34年頃 礼拝出席の河本さん御夫妻

クラブビル重役の職も辞し、漬物業に転業なされた。

神第一を社訓とし、安息日を聖くすべしと日曜日は店を閉め、家族だけでなく、従業員にその日の日当を払って礼拝に出席させた。盆と正月しか休まない当時としては、随分困難

なことだったと思うが、「人に従うよりは神に従うべきなり」と断固従われたのであった。

どの集会にも出席し、いつも前から二番目の席に座って、謙虚に祈っておられた。肩巾の広い巨体がどっしり座っている姿を見るだけで、集会が落ち着き、安心できたとは当時を知る皆さんの証言である。

口数は少なかったが、不言実行、神の言に対して単純明解に従われた方だった。また愛の人で、人の面倒をよく見られた。

まだ年若い榎本先生を陰に日なたに助け、先生に対して終始一貫、「神より遣されし器」としての尊厳な姿勢を失わず、神に仕えるが如きであった。

今日多くの教会で、牧師と信徒との間に不協和音あるを聞くにつけ、前田教会の信徒は先生に従ってそれが無いのは、小太郎兄が残した足跡による大きいと思う。文字通り教会の一粒の麦となって、多くの実を結ぶ基いとなった。

兄が召天したのは、昭和三六年二月四日であった。享年六九才。二月六日、榎本先生の司式のもと、八幡バプテスト教会に多くの参会者を得て、盛大な中にも厳粛な告別式が行われた。

(小太郎兄の生涯は、かつ奥様の遺稿に詳しい)

〈その他の思い出〉

バプテスマ受洗者は、昭和三〇年から四九年までの二〇年間で一〇五人である。



昭和44年 バプテスマ (河内)



参列者一同

バプテスマ式場は、昭和二八年までは大蔵川上流で、二九年から三六年までの八年間は紫川上流で、三七年から再び大蔵川上流で行われるようになった。

小鳥が鳴き、自然に囲まれた谷川に全身を浸し、主の死とよみがえりにあずかれることは誠に幸いというほかない。三月、四月の早朝はまだ寒く、あの時の水は冷たかったけれど

も、新生の喜びも大きかった。「子よ心安かれ、汝の罪許されたり」、そういう御声を聞いたような思いがした、そんな思い出をもっている人は多いと思う。

クリスマスにも多くの思い出がある。

日曜学校の生徒の出演のほかに、教師達や婦人会もいろいろな出し物で、やんやのかっさいを受けたものである。

祝会の会場も、昭和三四年から三八年までは中央公民館の広い舞台で本格的に行った。プログラム最後の青年会の劇がクライマックスに達し、出演者も大熱演、観衆も涙をにじませながら見入っている最中に、「閉館の時間ですからお引き取り下さい」という場内放送が入り、水をさされたこともあった。

今はやっていないが、愛餐会も楽しいものだった。夕食を共にし、はめを外してゲームを楽しんだ。

クリスマス・キャロルも楽しい思い出である。

終戦後しばらくは、電車と歩行で回ったそうである。時には終電車もなくなつて、折尾から前田町まで大声で讚美歌を歌いながら帰つたこともあつたが、今でも忘れられない思い出となっている。

河本商店のトラックの荷台に乗って回ったこともある。そ



昭和33年 クリスマス祝会



クリスマスキャロル

の後、西鉄のマイクロバスを借りて回るようになった。バスの中の会話がまた楽しかった。

行く先々でミカンをもらったり、アメユで冷えた体を暖めてもらったり、アパートの団地では我々の歌声にあちこちの窓が開き、顔を出して聞いてくれ、アンコールまでしてくれたこともある。病院でも歌った。商店街を歌って歩いた時、酔払いのおじさんが献金をしてくれたこともある。みんな楽しい思い出である。

五 会堂改築から現在まで

(昭和五〇年代)現在)

〈会堂改築の経過〉

主の祝福によって信徒の数が増えてくるに従い、その都度増築してきたが、敷地も狭く、これ以上の増築は困難な状態であった。

母子室が増築された昭和三九年の頃すでに、榎本先生には会堂改築のビジョンが与えられ、祈っておられたのではないだろうか。昭和四〇年頃、先生から改築構想が出された。

先生は、募金活動など他に援助を求めず、主から与えられたもので建てること、指定献金、予約献金もせず、ただ各自が恵みに感じて示されるところに従い、誰にもわからぬように献げること、そうでないと主の恵みを受けることができななどを話され、受付の柱に会堂建築献金箱が掲げられた。

その時は、私達には不信仰にも果たして多額の献金(目標一、五〇〇万円)が集まるだろうかという心配があった。しかし、このための祈りが始められた。

時折、献金の額が報告されたが、思うように集まっていかなかった。

「だから、あなたがたの持っている確信を放棄してはいけな

い。その確信には大きな報いが伴っているのである。神の御旨を行って約束のものを受けるため、あなたがたに必要なのは忍耐である」(ヘブル一〇・三五―三六)

このことは主の業である。主は全能者、そして責任をもって事を行われる方である。主は必要とあらば必ず与えて下さると信仰を新たにしながら、祈りは続けられていった。

五年経った昭和四五年九月、教会の隣の旧中川邸を買って欲しいという申し出が持主からあった。土地一七九[㎡]で五三万円、これを払うと建築費がなくなる。しかし、先生は信仰をもって買うことにされた。主が業を始められた御手を感^じ、エリヤの時の手ほどの雲(列王上一八・四四)のように思えたに違いなかった。

家は老朽化していたが、しばらく日曜学校の分級などに使用していた。祈りはなお続けられた。

昭和四九年五月、主の導きと信じて、旧中川邸を取り壊し、まず牧師館を建築することにした。大阪で建築業をしておられた丸山兄姉が主の御用と家を引き払い、教会の近くのアパートを借りて住み込み、工事に当たって下さった。

八月末に完成、牧師館は移転した。それまでの牧師館は、周りに家が建って陽当たりが悪く、

日中でも電灯をつけねばならなかったし、風通しも悪かった。天井も低くて、二階の会堂の足音が、^かかに響いていた。増築はされたが、決して良い住環境とはいえなかった。そういう中で先生御夫婦は主に仕えておられた。今、新しい牧師館が与えられて、大きな感謝に包まれたに違いない。私達信徒にとっても大きな喜びであった。

牧師館は木造二階建、延建物面積一三九・六[㎡]で、建築費は約一、〇〇〇万円であった。

牧師館建築費を支払うと、献金額の残りはわずかとなり、とても会堂建築はできない状態であった。それで丸山兄は旧会堂は手を加えれば十分持てるので、改修を提案した。しかし先生は、「事を行うエホバ、事をなしてこれを遂ぐるエホバ」(エレミヤ三三・二)とあるように、主は必ずやって下さる、天の窓を開いて必要を満して下さるから、信仰もってやりましょうと、人間的なあてはないけれども神様をあてにして、会堂を建築することにされた。ここに「見ゆるところによらず、信仰によって歩む」先生の姿勢を見るのである。昭和四九年九月一六日から旧会堂の解体作業に入った。これには教会員の皆さんも参加した。誰から言われたのでもなく、自分達の教会を建てるのだという気持ちで、老いも若き



牧師館 工事

も手弁当で集まってきた。会社勤めの人も休暇をとって、何かお手伝いをと参加した。それは、昔イスラエルの民がバビロンの捕囚から解放されて、神殿復興に立ち上がった様を思い起こさせた。

丸山兄の指導により屋根がはがされ、一つひとつ取り壊されていった。ある者は取り壊しを手伝い、ある者は壊した物を運び、またある者は新会堂に使う古材の釘抜きに精を出した。

三〇年近い間、礼拝を守ってきた会堂、柱一本、窓ひとつにも思い出がよみがえる。いとおしむようにして解体作業は進んだ。格別、先生御夫妻には、会堂の隅々に主の恩ちようの思い出が刻み込まれ、感慨深いものがあつたと思う。残暑の厳しい中で、みんな土と汗にまみれて働いた。しかしその目は、主の業にあずかる喜びに輝いていた。昼食を共にし、

一日の働きが終わると、一緒に讃美歌を歌って主をあがめ、心を合わせて祈った。

このようにして、解体作業はまたたく間に終了し、九月三〇日に会堂建築の定礎式が行われた。

さて、会堂が解体された後、礼拝はどこで守ればよいのだろうかと心配していると、「主の山に備えあり」である。主は教会のすぐ近くの理容会館の二階講堂を備えて下さり、貸していただくことができた。礼拝は理容会館で行い、伝道会、祈禱会、木曜会、禱告会は牧師館で滞りなく行うことができた。しかも主の御業の素晴らしいことは、四か月ほど経って、家主の理容組合から「お気の毒ですが、来月からお貸しできなくなりましたから、他をお探し下さい」と言われた時には、その期限までには新会堂が完成できることになっていたのである。まことに主のなさることは、時になつてうるわしい。建築工事が始まった。丸山兄のほか丸山兄の同労者草崎さん達も加わって下さった。勿論、教会員の皆さんもお手伝いをした。基礎のコンクリート打ち、ブロック積みと、まるで手慣れた者のように一つひとつ出来ていった。形が見えて来るに従い、いよいよ自分達の教会ができるのだという大きな喜びに包まれていった。



牧師館上棟（一日の働きを終えて）

十一月一日、上棟式が行われた。屋根の支柱に

は、「汝はキリスト、生ける神の子なり」（マタイ一六・一六）の聖言が書かれた板が掲げられた。

棟上げが終り、屋根ふき、壁と進んで、内部工事に取りかかる。工事責任者である丸山

兄は、少い予算の中でどうしたら素晴らしい会堂を造ることができるか、昼も夜もそのことで頭がいっぱいであった。本当に全霊全身を打ち込んで下さった。だから、会堂の隅々に至るまで心が込められていた。

ソロモンが神殿を建てた時、主はヒラムを用い、知恵を与えて素晴らしいものを造らせた」と記されているが、主は丸山

兄を用いて、これに当たらせ給うたことを覚えるのである。教会員の皆さんも丸山兄の指示に従って、一本一本祈りをもって釘を打っていった。

会堂建設にかかった時は、建設費の予算が立たない状態であったが、建物が出来ていくに従い、不思議なように全ての必要が満たされていった。

「今より我は主なり、我行わば誰か止むることを得んや」（イザヤ四三・一三）とあるように、始めから終わりまで主が備え、行い、全うして下さった。私達はただ主をあがめるばかりである。

もうひとつ感謝すべきことがあった。まだ神様を知らなかった草崎さん達が皮表紙の聖書を買われ、読むようになったことである。

このようにして、昭和五〇年三月一日、会堂は遂に完成した。

木造二階建、延建物面積約三〇〇〇㎡、総工費約一、五〇〇万円であった。落成感謝式に招かれた来賓の方が言った、「こんな素晴らしい会堂が、そんな費用で建つなんて考えられない」。

〈落成感謝式〉

落成感謝式は、昭和五〇年三月二一日午前一〇時三〇分から、木の香りも芳しい新会堂で行われた。

通常であれば献堂式とするところであるが、榎本先生は、この会堂は私達が造って主に捧げるのではなく、主が今も生きて万物を支配し、導いておられるあかしとして私達に与えて下さったものである、と「落成感謝式」とされた。



落成感謝式（式辞を述べられる牧師先生）

当日は、教会員はもとより前田教会から各地に遣わされた多数の方々も遠路はるばる参加して下さった。参加総数二〇六人、新会堂はあふれんばかりの感謝と讚美で満ちていた。

先生は「主は王となられた。世界

は強く立って、動かされることはない」（詩九六・一〇）の聖言により式辞を述べられた。「私達の住んでいる現実の世界は、人の手や力によって動かされているように見えるが、実際は神様の許しがなければ何ひとつできない。どんなに科学が発達しても、ただ神様だけが私達人間の命を支配し、導いておられる。私は聖書を通してこのことを教えられ、以来四〇数年間、この神様の御支配に従ってきた。そのためにいろいろな戦いや困難の中を通ったけれども、その都度、神様は真心をもつて依り頼む者を真実をもつて支えて下さり、今も生きておられることを体験をもつて知ることができた。この会堂も私達の計画ではなく、神様の導きで与えられた。誰れ一人『私は教会のためにこれだけ献金した。だから教会ができた』という人はいない。みんなが喜びをもつて、会堂改築のためにいろんな形で参加してくれた。御婦人方もゴミを被って力仕事に当たってくれた。お金を出せば、もっと豪華な会堂はできたかもしれない。この会堂はそういう豪華さはないけれども、神の恵みが隅々まで行き届いている。神様がいかに恵み深い方であるかを、私達は体験させていただいた。今日この日を感謝すると共に、ここから新しく王の王なる御方に謙虚にお従いしていきたい」と、万感の思いを胸に熱ぼ

く語られた。

その後、大濠公園教会（代表 藤掛邦夫兄）から備品贈呈（レザー張ベンチ五〇脚、聖書台三台、聖餐卓子三個）があり、建築を担当した丸山工務店、草崎工務店に対する感謝状贈呈が行われた。



丸山工務店へ感謝状の贈呈

午後からは感謝会に移り、来賓の牧師、学校の先生や遠来の信徒の方々から、祝辞、感想、思い出が語られ、感謝の内にと終わった。

この度の会堂改築は、単に会堂が建て替ったというのではなく、教会四〇年の歩みの中で与えられた聖言に立つ信仰、主を主とする信仰の集大成ともいえるべきものであったと思う。この会堂は、

主は今も生きておられる、信ずる者を導いて下さることのあかしであり、エベネゼルの記念碑でもある。願わくは、この会堂のある限り、この信仰が語り継がれ、守られていくように。

〈献身者〉

この時期に相次いで献身者が与えられたことは、主の恵みと導きであり、誠に感謝なことである。

これより前、昭和三〇年代始めに東俊郎兄が献身に導かれた。東兄は救われる前は大酒飲みで、借金で首が回らなかった。



昭和28年 東俊郎兄

だが、妹の泰子姉と教会に来るようになり、主に祈って酒もタバコもピタッと止めることができた。献身して、一年間前田教会で修養

生生活を送り、関西学院大学神学部大学院を経て、日本キリスト教団教師となり、現在日本キリスト教団八尾教会の牧師をしておられる。



伊規須兄姉

昭和四八年三月四日、伊規須太郎兄と泰子姉の献身式が行われ、戸畑伝道所の御用に当たられるよ

うになった。昭和六一年三月二三日、伊規須先生の按手礼式が行われ、同時に戸畑伝道所は基督伝道隊戸畑教会となり、初代牧師となられた。現在、定期集会のほか、テレホン聖書や文書伝道など開拓伝道が続けられている。

昭和六〇年三月三十一日、榎本先生の御息榎本和義兄と文子姉の献身式が行われた。和義兄は関西学院大学大学院を卒業後、愛知大学の英文学の助教授として、教育と研究に没頭していたが、昭和五九年の年末より主の愛に迫られ、その愛に自分は何をもってこたえたか、そのことが心から離れず、絶えず迫られて夜も眠ることもできなかつた。遂に主が自分を求めておられることを知り、生涯の全てを捧げますと献身を決意なさつた。



榎本和義兄姉

早速大学に辞表を提出し、榎本先生に修養生として受け入れてほしいと申し出た。丁度、大濠公園教会が改築されて留守番役を必要としていたので、そこに落ち着かれた。現在、大濠公園教会での御用に当たっておられる。

和義先生の献身については、誠に劇的であるということ、また榎本先生が肺炎で倒れた直後であることを思う時、主の

不思議な導きを感じるのと同時に、先生御夫妻の永い間の祈りがあつたことを感じるのである。



水村光義兄

水村光義兄の献身もまた、榎本先生が二回目の肺炎をなさつた後であり、同様に主の御計画の内にあることを覚える。

水村兄は大谷中学の美術の教師をしていたが、主の召命を受けて献身された。献身式は昭和六二年四月五日に行われた。一年間、修養生として教会に起居し、榎本先生の指導を受けながら教会の奉仕に従事していたが、主の導きにより、六三年四月関西聖書神学校に入学、現在、神の器としての訓練を受けている。

〈海外旅行〉

主は先生御夫妻に三度にわたって海外旅行の機会を与えて下さつた。

第一回は、昭和五三年六月に約二週間のアメリカ・カナダ旅行であつた。この時、御息の和義さんが二年間の予定でインデアナ州立大学に留学中であり、その様子を見るためと、カナダのトロントにおられる西原さん、鈴木さん達に会うた

めであった。西原さん達とは渡加以来一〇数年ぶりの再会であり、どんなに喜ばれたことであろうか。すでに西原ふくよ姉は召天されていたので、一緒に記念会を行った。



カナダ・トロント市役所前にて

また、大阪集会に出ておられた菊池さんがロスアンゼルスに行っておられ、ぜひ寄ってほしいと熱望されていたので、途中で立ち寄って菊池さんに会い、ロスアンゼルス日本人教会で御用をなさって、帰路に着かれた。

渡米中は、和義さんと一緒の時は言葉の不自由はなかったが、御夫妻だけで行動なさる時は誰も頼る人もなく、学生時代に覚えた英語と身ぶり手ぶりに加え、神様が何とかして下さるといふ信仰と心臓(?)とで見事意志疎通を図られ、無事帰国された。



ローマ・コロシウムにて



パリ・ベルサイユ宮殿にて

第二回目は昭和五四年五月一四日からで、この時は先生だけであった。

この年、和義さん夫妻が留学を終えて帰国する年であり、その準備と菊池さんに再度会うためである。この時は和義さんの運転する車で、インディアナ州からニューオーリンズまでアメリカ大陸縦断旅行をなさった。行けども行けども限りなく続く地平線、アメリカ大陸の広大さと創造主の偉大さを実感して帰られた。

第三回は、昭和五五年三月七日から二週間、御夫妻そろってのヨーロッパツアー旅行であった。イギリス、スイス、イタリア、フランスと回って来られた。

ロンドンの広大な公園と歴史ある建物、ローマの古代遺跡、

パリのノートルダム寺院の荘厳な建築物などヨーロッパの古い歴史と文化にふれ、またスイスの美しい山々を見、それぞれの国々の歴史を導き給うた神様の偉大な御業を、御自分達の歩みと重ねながら、感慨深く御覧になったのではないだろうか。

この年はちょうど結婚四〇年に当り、神様は——当世風に言えば、素晴らしいフルムーン旅行を与えて下さったのであった。

〈先生の大病〉

榎本先生は、神様のお恵みで健康には恵まれてきた。戦後ののぞみが丘時代の昭和二二年八月に、過労から四〇度の熱が出た時以外に礼拝を休まれたことを聞いたことがない。新年聖会前に体調をこわされて、聖会の御用が危ぶまれた時も、聖会までにはいやされて、御用を全うされた。大濠公園教会との兼牧であり、月曜日以外は集会のない日はなく、そのほかに教会の事務的なこと、来客との応待、大阪集会や他教会の聖会御用など、文字通り超人的な忙しさの中も、主が健康を支えて下さったからクリヤーしていくことができた。先生はいつもこのことを感謝しておられた。

その先生が二回の大病を経験された。

昭和五九年一〇月七日の礼拝の時であった。一週間前から風邪気味だった先生は、その日は比較的气分が良かったので講壇に立たれたが、途中で体のふるえとおかんに襲われた。

私達はしばらくして、先生の様子のおかしいのに気付いた。見るからにきつそうで、ただ気力で立って御用をされているようであった。吐気を催されたのであろう、バケツを要求され、説教を続けられたが、もはや限界であった。早目に話しをまとめ、講壇を降りられた。

このような事態は私達には初めてであり、ただ事でない様子に、先生にもしものことがあったら大変だと、ただそれだけが心配であった。

翌日、堤先生にかかりX線を撮ったところが、重篤な肺炎であり、即入院ということになった。

三菱化成病院に入院されてからも、しばらく高熱が続き危険な状態もあった。先生からは、見舞は無用のこと、各自主に祈るようにとの伝言であった。

私達は、百合子先生からの情報で先生の病状を伺いながら、各集会で心を合わせて祈るばかりであった。

一月に入って、名古屋におられた和義さんが御見舞のた

め帰郷された。そして、別れ際に御両親に向い、自分は大学にズーッといて、九州に帰ってくるつもりはないから、二人で仲良く暮して下さいと言いついて、名古屋に帰ったそうである。それから二か月もしない内に、和義さんは神様の愛に迫られ、献身に導かれたのである。誠に人の計画ではなく、先生の病氣も和義さんの献身も、すべて主の御旨のみ堅く立ったのである。

一月一〇日に退院、翌一日の礼拝に出席されたので、私達信徒はびっくり仰天、こんなに早くいやして下さったのかと心から主をほめたたえた。

退院時に主治医から、これからは無理をしてはいけない、制限時速五〇キロのところを一〇〇キロで走れば必ずオーバードルトする、今後は非常勤管理職ですよと念を押され、活動に制限を加えられたが、先生は死ぬべきところを生かさされたのだからと、いよいよ恵みに感じ、霊に燃えて御用に当たって下さった。

昭和六〇年の新年聖会では、「私達の国籍は天にある。そこから主イエス・キリストの来られるのを私達は待ち望んでいる」(ピリピ三・一二)の聖言をもって語られたが、その情熱は私達には遺言として言われているようにささえ思えた。

その後の先生は、自重されながら御用をされていたが、間もなく和義さんが献身をなさって、大濠公園教会の御用を受け持たれるようになったので、先生の荷も軽くなった。神様はこのように備えて下さった。また、六一年三月には、伊規須先生の接手礼式が行われ、戸畑教会が独立したことも、主の備えのひとつだったのではないだろうか。

先生の体調も徐々に回復し、元に戻られたのではないかと思われた矢先の昭和六一年一月、燭火夕拝(二四日)のあと疲れが出て、二五日に発熱し、床に臥して静養されたが、熱は下がらず、二九日に三菱化成病院に入院された。このため、六二年の新年聖会は、標語は掲げられたが中止となった。先生にとっては本当に残念なことだったと思う。先生の高熱はなかなか下がらなかった。主治医も当初は通常の肺炎であり、二週間ぐらいで退院できると考えていたが、病状がこういう好転しないので、精密検査が行われた。その結果、ウイルスによる異常肺炎であること、現在極めて危険な状態にあり、これまでこの病気で助かった例はないことが告げられた。

先生は苦しい状態の中で、「私は限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実を

尽くしてきた」(エレミヤ三一・三)の聖言に信頼し、主の愛の中に平安をもっておられた。生きるも死ぬるも主の手にゆだねておられた。

けれども、病状はさらに悪化し、体力は衰え、呼吸困難が続いて酸素吸入が施された。レントゲン写真では、病巣が肺のほぼ全域まで広がり、絶望的な状況であった。

私達信徒には詳しいことは知らされていなかった。誰れかれとなく、先生の状態が良くないということが広がり、私達は心を痛めて祈った。

集会は信徒が交替で御用に当たり、休まず続けられた。ある日の祈禱会の席で、先生が危篤状態にあることが告げられた。このために一人ひとりが声を出して一生懸命に祈った。ペテロがヘロデ王に捕えられ牢獄に入れられ、生命の危険があった時、「教会では彼のために熱心な祈りが神に捧げられた」(使徒行伝二二・五)ように、先生を病いの獄(ひとや)から解き放ち給えと、みんなで心を合わせて祈った。

教会のみなさんも先生が現代の医学では如何ともしがたく、「心の内で死を覚悟し、自分自身を頼みとしないで、死人をよみがえらせて下さる神を頼みとする」(二・コリント一・九)ほかない状態であることを知って、真剣な祈りが続

けられた。

ある日曜学校教師会の時、和義先生が病床の榎本先生の声をテープで聞かせてくれた。それは遺言ともいべきもので、自分がこれまでこの神様を信じて従ってきたこと、この主に信頼していけば必ず支えて下さる、だからどんな時にも信頼していくように、そしてこの主を手ざわるように知ってほしい、このことを皆さんに勧めてほしい——そのような内容であった。それは御生涯の結論であった。苦しい息の中で、力をふりしぼるようにして、一言一言とぎれながらも、しっかりと口調で語られていた。

私達は襟を正して拝聴した。そして、パウロがエペソ教会の人々に惜別の言葉を語った(使徒行伝二〇・一七―三八)様を思い起こし、先生がそのような状態の中でも、どんなに私達のことを心にかけておられるか。また「わが子羊を飼え」(ヨハネ二一・一六)とおっしゃる主の聖言に忠実でいらっしやったか、改めて感じたのである。

一四日頃から少しずつ回復のきざしが見え始めた。次第に呼吸が治まり、食欲も出てくるようになった。一月末には自分でトイレに行けるようになるまで回復した。

これらのニュースが教会に伝えられると、みんな光明を見

い出したように明るい表情になり、主が祈りにこたえて下さったことを覚えて感謝した。

その後も順調に回復し、二月一五日に退院、およそ五日ぶりに懐かしの牧師館に帰ることができたのである。

我らの主はほむべきかな、「わが仕うる万軍の神エホバは生く」(列王上一七・一)、主は我らの祈りに応え、先生を死の陰の谷から導き出された。

「どうか、彼らが主のいつくしみと、人の子らになされたくすしきみわざとのために、主に感謝するように」

(詩一〇七・八)

「主に感謝せよ、主は恵み深く、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない」

(詩一〇七・一)

願わくは、この大いなる奇しき御業が、八幡前田教会の歴史の中で永く記念として残されるように。

六 おわりに

これまで、教会五〇年の歴史を四つの時代に区分し、榎本先生の信仰の歩みと重ねながらたどってきた。

半世紀に及ぶものであるから、すべてを記載することはできず、内容も表面的にならざるを得なかったが、歴史的事実

よりも、できるだけその底に流れている信仰を記述することに努めたつもりである。

それは、「わたしたちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力である」(一・ヨハネ五・四)とあるように、「イエスを神の子と信じる信仰」(同五・五)こそ、いつの時代でも世に勝たしめるものであり、これこそ代々語り伝え、受け継いでいかなければならないものであると考えたからである。

五〇年前、先生によつて蒔かれた福音の種がこのように成長し、実を結ぶに至ったことは、主のあわれみと大いなる御業の故である。

かつて、アブラハムが主から「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい」(創世一二・一)との聖言を受けて、一人従ったことによつて、多くの国民の父となり、その子孫は天の星のように増えていったように、榎本先生が一人従つてこられたことにより、今日このように多くの方々が救いにあずかり、御国の民とされたことを見るのである。

それはまた同時に、信徒一人ひとりが主に従っていくとき、主の祝福と御業により、多くの国民の父となることを示していると思う。

八幡前田教会は、これからまた新しい五〇年に向かって歩
き出した。榎本先生の地上での御生涯が、いつまで許される
かわからないが、私達が教えられた信仰をしつかり受け継ぎ、
主に従っていけば、主は永遠に生ける方である、必らず御自
身の栄光を現わして、大いなる五〇年とし、次の使徒行伝を
記して下さいにちがいない。

願わくは、聖霊なる神が、私達の心と思いを守り給わん
ことを

願わくは、「今より我は主なり」と言われる父なる御神が、
八幡前田教会を導き、祝福し給わんことを。



榎本牧師の八十年史

牧師八十年史

榎 本 利 三 郎

一 は じ め に

わたしはあなたをまだ母の胎につくらないさきに、

あなたを知り、

あなたがまだ生まれないさきに、

あなたを聖別し、

あなたを立てて万国の預言者とした。

(エレミヤ 一・五)

牧師の八〇年の歩みの中の五〇年は「教会の歩み」に記録されて居ます。従ってここでは、牧会以前の歩み、又八〇年の歩みの中の数項目を記す事にしました。八〇年の歩み、そのものが実は主の恩寵そのものでした。

二 我が恵みに会いし生涯

典型的な農村に囲まれた田舎町（愛知県宝飯郡国府町字流霞一三三番地）で、荒物、雑貨、食品などの小売商を営む、父榎本久三、母しなの三男として、明治四二年（一九〇九年）四月二八日に生まれました。

兄弟七人で長男は生後三ヶ月位で夭逝し、成長期には男兄弟六人で、私は次男なのに、なぜ利三郎なんて三男の様な名前をつけられたのか、と長い間不思議に思った事があります。

幼児期の思い出になる写真（もち論、当時は写真は高級品で、何事かの時には写真館へ出掛けて撮ってもらわなければならなかったのです）も記憶ありません。後年、母が「お前と佐六（六男）だけは母乳があった」と語っていました。

物心ついた頃、住居区と店は障子一枚で仕切られており、住居区にも商品がいろいろ置かれていて、店の中で生活しているようでした。両親は仕事が忙しくて、子供は自分で遊び、けんかし、和解しておりました。

店にはお産に使う油紙から、葬式の棺桶の材料まで、抹香、ローソク、線香、味噌、醤油、砂糖、酢、油、ブドー酒、サ

イダー、ビール、食用油、コールドール、セメント、ガラス、釘、鎌、鋸等の金物、帽子、眼鏡、タバコ、タバコ入れ、キセル、釣竿、魚籠、釣針、ランプ一式、カラ傘、スゲ傘、合羽、ゴム靴、学用品、紙類（障子紙、襖紙、チリ紙、包装紙など）事務用帳簿、筆墨、インキ、生活用品（箸、杓子、スプーン、鍋、釜など）、農業用品（種物、その他道具）鳥モチなど、種類が多いので、注文に応じて、客の要求に応じて、幾種類か持出して、値段と品物について客と話合つて、必要量を整えて渡す。一品一品に手間と時間がかかつて、今では考えられないのびやかな風景だったと思います。中には急ぐからと割込んで買って帰る人もあり、今日のようにあらかじめパツクしてあるわけではなく、その都度、秤にかけ、枡ではかる。忙しい時にはお客に自分で、量つて行つてもらふこともありました。

店には一つの鑄物の火鉢があり、冬は炭火を入れて暖かく、夏は線香を立て、煙草の火種を絶さないようにしてありました。客のない時（そんな時は珍しいことでしたが）は父は火鉢の前に座つて、プカプカ煙草を吸っていました。私はそんな時、父の膝にチョコンと腰掛けたことがありました。父は私を抱き締めて、頬づりしました。父の短く生えていたひげ

の痛さと父の吐く息が煙草臭くて、急に父の膝から逃出ししました。大好きな父であつたが、あの煙草の臭いがいやで飛出したので、父もポカンとして、どうしてなのかわからないようでした。この出来事は後年青年期になつて、生意氣盛りの頃、友人たちが先生に隠れて盛んに煙草を吸っていた時、また自分の家に煙草はたくさんあつても吸う気にならなくしてくれたのだと思います。

店がゆっくりしている時、雨降りの日、夜、日が落ちてからなどには、一人、二人のお客と煙草を喫みながら、いろいろな話をして、父を家庭問題、金銭問題、人間関係などの相談相手にしていたようです。当時の日本は国が貧しかったので、生活も大変な時代でした。生活に困っている人に母はそつと品物を添えて渡しているのを見ることがあります。後年夏休みなど、店を手伝つて、味噌、砂糖、油など、生活必需品を量るとき、「目方をよくしなさい」「困っている人には少しでも役立つことが人のすることだ」と母から言われた事を思い出します。

小学校入学前はかなり暴れん坊だったと今思います。一年余りの年上の兄にはなんでも負けん気でぶつかつたようです。また、かんしゃく持ちで時には額に青筋を立てて怒つた

ようです。「かんしゃく持ち」と兄弟の間で恐れられたようです。私はそれが「男らしい奴だ」と言われているような気持ちで得意になった事もありました。

小学校四、五年の頃でしたか、当時教育勅語が教育、道徳の基準とされており、修身（今日の道徳）の時間に、兄弟相和し（兄弟仲良くしなさい）と教えられ、自分がかんしゃく持ちで、すぐに兄とでも弟とでもけんかしてしまいます。「これではいけない、これではいけない」と思いながらも、直りません。

ある日、弟を乳母車に乗せて、子守りに兄と二人で出掛けました。町外れに幅五〇メートル余りかと思われる川があり、豊成橋と呼ぶ当時としては見事な橋がかかっていました。兄に向かつて素直に「兄さん、いつも怒ってすみません」と一言詫びたいと心で常に思っている、言いたくない自分の情けなさを悔いていました。その日、二人で仲良く乳母車を押して、豊成橋まで来た時、ちょうど通行人もおらず、他の家族もいないので、重大決心で兄に向かつて、「兄さん、いつも怒ってごめんね、もうこれから兄弟仲良くしようね」と言いました。言ってしまったあと、何とさわやかな事かと思いました。兄は急に私が改まって、殊勝な事を言いだしたので、

ちよつとどきまぎした様子でしたが、「そう、仲良くしよう」と答えて、橋の中央を過ぎた時、なにが原因か忘れたが、急に私が腹を立てて兄に怒ってしまいました。たった今、橋に差掛かって、仲直りして約束しておきながら、五〇メートル程の橋を渡り切らないうちに腹を立ててしまった。悔いても悔いても取返しがつかない、自分の惨めさ、悪いと知りつつ止められない、なんとかこの状態から立上がり、善を行い、悪を拒む力が欲しいと幼な心に渴きを覚えました。

小学校入学時に、聴力に故障があることが分り、父が担任の先生に頼んで、最前列に席を決めてもらいました。それ以来、学校生活では、常に最前列に席を確保するようになりました。教卓の直ぐ下で、悪ふざけは出来ず、仕方なしに講義を聞かなければならない羽目になりました。

小学校時代の友人に平松君と武田君とがいました。平松君は大きな肥料問屋の長男で、聡明な男の子らしい男の子で、学校から帰ると良く平松君の家へ遊びに出掛けました。ちよつと離れた子供部屋があつて、明るく、冬暖かく、絵本や物語の本等がたくさんあり、玩具もいろいろあつて、毎日商品の中で、子供と縁の遠い店屋の中で暮らしている私に取つて、夢のような子供の国へ来ているように、楽しく遊ば

せてもらった事が今も鮮かに頭の中によみがえってきます。三時になると、当時は西洋菓子として珍らしかつたビスケットなどをおやつにいただいたり、肥料のこうばしい臭いのする土蔵の中でかくれんぼう、鬼ごっこをしたことなどなつかしく思い出されます。

小学六年生になって間もない頃、担任の先生が、「上級学校へ進学する人は手をあげなさい」と言われた時、一斉に三、四人が手を上げた。平松君、武田君、林君等が手を上げているのを見て、「負けてたまるか」と手を上げた。ところが男兄弟六人もいるので、皆上級学校へやるわけにはいかない。両親の経済力も何もわからない私でした。兄は名古屋の商業学校へ進学していたので、自分も進学させてもらえると改めて、手を上げてしまったのです。

それから毎朝の日課、登校前の清掃をさっちりやり、放課後は遊ばないで店の手伝いをする。父が「近頃よく言うことを守るようになった」と喜んで、機嫌の良い時をねらって、父に「中学校へ行かせてください」と申し入れました。暫く考えていたが、「お前、月給取りになっても、升入に入っただけしかもらえない。それに比べて商売人はいいぞ。苦労も多いが、苦労しただけは自分のものになるのだ。商売人になる

には学問なんかそれ程いらぬ。商業学校を出たら上等だ。商業学校へ行くなら行つてもよい。中学を出ても、帯には短くたすきには長く使いものにならないから駄目だ」と反対されました。しかし、商業学校なら許してもらえそうなので、なんとかしてもう一押し押して、と母に頼みました。母は「叔父さんも叔母さんも皆優秀であったが、学資が出せないの、皆高等小学校で年期奉公に行つて、立派な商人になつている。叔父さん達にも気の毒だし、兄弟六人もいるのにお前だけというわけにもいかん」とあきらめさせようとなりました。

当時、まだ和服が生活の衣料で、洋服を着るのは軍人・警察官・学校の先生・中学生位で、和服を着た一般人から「旦那、先生」と呼ばれ、皆が丁寧にあいさつをするのを見て、毎日毎日「いらっしやい、ありがとうございます」とお客一人一人に丁寧に頭を下げてあいさつする生活がなんだか馬鹿らしい気持ちで、自分も他人からあいさつされたら「ウフン」と肩で風切つて歩く洋服族になりたいと、単純な幼稚な思いで一杯でした。ですから、粘りに粘つて、父に納得してもらいました。一つ条件付でした。それは一回だけ入試を受けさせる、合格しなかつたら高等小学校へ行って、叔父さん達のように年期奉公へ行きなさい、と言渡されました。そのとき

は嬉しくて嬉しくて夜も眠れない程でした。

まだ受験準備の特別な勉強も何もなかった頃でした。二期になると、入試が不安になってきたので、担任の先生に頼んで、課外勉強をしてもらうことになりました。先生は黒板一杯に問題を書いて、出来たら見せて帰ってよい、とのんびりした受験勉強でした。一、三人の友達と話合って、「この位すぐ出来るから、ちょっと山で遊ぼう」と誘い出して、学校のすぐ裏の山へかけ上がり、鬼ごっこ、かくれんぼなど、遊びに夢中になって、気がついて帰ったら先生から大目玉で、「そんなに遊びたかったら、勝手にしろ」と言われ、謝りに行って、やっと続けてもらいました。

武田君は私の家からかなり離れた田園地帯にある広い蜜柑畑のある旧家の息子さんと、何人か兄弟がおられたが余り会った事はありませんでした。もともと医者だったというところで、今思うと、私が行って遊んだのは昔診察室だった部屋のようにでした。大名が乗るような大きなかが倉庫の天井につるしてあり、武田家の紋が大きく書かれていました。庭も広々しており、いろいろな珍しい花や植物があり、それが後に私が植物に興味を持ついとぐちになったのではないでしようか。御母堂は温かい、親しみ安い方で、時々店へ自ら買物

にもこられ、大家の奥方と言うより、近所のおばさんという親近感を与える方でした。後年、私が明専に在学中、武田君は京都高等医学専門学校に在学中に病死され、夏休みに弔問に伺った時、「榎本さん、うちの子は体格もよいので少々無理しても大丈夫と思った。けれどもあんたはやせているし、顔色もさえない。この人は中学でやめたらしいのに、可愛そうに、受験勉強したら死んでしまうだろう、と案じていたのに……。うちの子供が死んで、見るからに弱そうなあんたが元気で、こんなに慰めに来てくれるとは……」と言われた姿が目には浮かんで来ます。そんなに弱々しく見られるような自分であつた事を教えられました。

小学校四年頃、叔父が蒲郡におりました。夏休みに泊まったことがありました。叔父の家には子供がいないので、大変可愛がられ、一、三日はよかったが、兄弟を離れて寂しかったのでしよう、ある夕方、叔母が「面白い所へ連れて行って上げよう。来てごらん」と一緒に行くと、夏の夕闇に一際目立つ大きな赤いちょうちんが軒につり下がっている家の前に出ました。今も鮮やかに思いたすのはちょうちんに書かれていた変った言葉でした。「福音学校」「福音・ふくおん」て何て変な言葉だろう。一体何だろう。その後、長年たつてイエ

ス様に救われるまで、分らないまま、誰にも教えてもらえなかったのです。その家にはもう子供達がたくさん集っていました。間もなく赤毛で青い目の異人さんが、片言の日本語で「さあ皆さん、こんばんわ。この歌を歌いましょう。」と模造紙に書かれた讚美歌四六一番を一字一字指差しながら子供に教えていました。当時、私には聞きなれない、見慣れない言葉で、一緒に歌えませんでした。その後何かがあり、何を聞いたか覚えていません。終わって帰りに綺麗なカードをもらって喜んで帰りました。だいぶ長い間、私の宝物だったと思います。これが私が始めてキリスト教（といっても、それがキリスト教であった、と気付いたのはずっと後のことでしたが）に触れた時でした。

私の生家は代々真宗の家で、物心ついた時から、毎朝大きな金ピカの仏壇に灯明を上げ、線香を立て、仏飯を供えて、拝むことになっていました。両親と祖母はどんな忙しい時でも欠かした事はなかった。私共子供も必ず朝は仏壇の前で拝礼をしなければ食事が始まらない、という厳しい訓練でした。夜も仏壇の前で、祖母の勤行の後ろに座って、終わるまで神妙に待ったものでした。この点、真宗の宗教教育といえますか、訓練といえますか、実践的ですからどうしても身につい

てしまうのでしょうか。小学校四年以上になると、一月に「報恩講」という行事があります。教祖か宗祖の何かの記念でしょう。一、二ヶ月前から、毎晩寺に集まり坊さんの法話を聞き、お経の訓練を受けます。声を揃えて、抑揚をつけて、称讃できるようにし、当日には昔の武士が着た袴をつけて、寺の内陣と呼ばれる最前列で、住職のすぐ後に座り、報恩講の行事勤行に参加するのです。しかも、四、五日泊まり込みでした。そのため、今でもお経の一部は暗誦出来る程です。今私共はこの素晴らしい救いに与かっていながら、この信仰を子供に残すために、どんな努力と工夫をしているのでしょうか、と反省させられます。

店の前は昔の東海道筋で参勤交代の大名小名が行列して往復した道です。私の子供の頃の交通機関は馬車、人力車、大八などででした。北風が吹きだすと、山地から柴木を馬車に積んで海岸へ運びます。どんぐりのついた木がよくまじっているのです、馬車について歩きながら、どんぐりを取り独楽こまを作って遊びました。時には荷台のちよつと空いた所へ、チョココンと腰掛けて、高級車にでも乗ったように、得意になって遊んだものでした。

文華堂という本屋さんが一軒ありました。新学年には教科

書を買に行つたのです。店先に色鮮かな絵本、少年少女向けの雑誌が並んでいました。当時の子供の小遣いではとても買えません。唯今も同じですが、立読みは出来るので、時々家を抜け出して、本屋で立読みしました。今も覚えているのは、お祭りの小遣いやお使いの駄賃（中元や歳暮を届けに行くと五銭、十銭と紙に包んでくれました）をためて、何冊か買ったことです。世界名作全集のような本で、薄い本を買いました。今思うとアンデルセンの童話が多かつたようです。

その中に異国情緒の漂う物語がありました。一人の乙女が選ばれて王妃となり、同族の者が皆殺しに会う危機一髪の時、王妃が命を掛けて王に訴えて逆転した話もありました。また、一人の娘が結婚して主人が死んでからも、しやとあ 姑に仕え、落穂拾いに行き、幸運に恵まれた話があつたのを思い出します。それは旧約聖書のエステル記とルツ記の物語であつた事がよく分ります。

本屋さんの本棚に並んでいる本でクロス表紙の天金で背に『二宮尊徳伝』と金文字で書かれた本がありました。当時二宮金二郎は修身の時間のヒーローで、よく学校に金二郎がまきひ薪を背負い本を読んでいる絵や像が飾つてありました。

修身の時間に二宮金二郎が父を亡くして、貧しい生活の中

で、時を惜しんで学問をし、農村の問題を具体的に解決して、多くの人々を助けた事を教えられました。あるときは家が貧しくて困っているなら、自分が金二郎のように生きて、子供のヒーローになれるのに、そんな家でないから損な立場だ、なんて少年心に思つた事もありました。

本屋にある『二宮尊徳伝』が欲しくて、小遣いをためて、ようやく手に入れた時のよろこび。ページをパラパラとめくと新刊本独特なおいが、プーンとしてくる。なんだか学者になつたような思いで、寸暇を惜しんで読んだものでした。二宮金二郎の実際に即した説と実行に魅力を感じたのでしよう。いろいろ良い事を言う人は多いが、実際の行動とは異なっている事が余り多かつたからでしようか。あるいは、自分の思いと行動が一致しないので、なんとか一致した生活でありたいと願つたからでしようか。

待望の中学の入試発表の日、幾らかのお金とバスケット（今日のバックに相当する物入れ）を渡され、「お前の頭では到底合格していかないだろうから、帰りには高等小学校の本を買つて来るがよい」と言われて、家を出ました。学校へ着くと文字通り黒山のように人が集っている。親が夢中になつて子供の名を探している。私に取つては異様な感じさえしまし

た。自分の名前を見付けようと、初めの方から探した。なかなか見当たらない。確かに合格圏の成績はあると自信はあったが、平松君の名は出ている。心細く、心臓がドキドキする。「えい、面倒だ、いっそ尻から見て行け」と最後の補欠合格者から調べた、終りからほどなく名前があった。嬉しくて、嬉しくて、夢ではないか、ともう一度、受験番号と名前を確認して、早速教科書、ノートなどを買い、制服、制帽、靴のサイズを探り、注文し、意気揚々と帰った事が忘れられない少年時代の思い出となりました。

中学生活で驚いたのは、教科毎にそれぞれ異なった先生が教えることと、また、靴履きのままで教室へ入ることでした。その頃は、年長者を敬い、後輩は先輩には従うべき規定が厳しくて、たとえ一年でも先輩であれば、返事が悪い、態度が悪い、等々、ちよつとした虫の居所が悪いと先輩から怒られる。怒られるのも怒鳴るだけならまだ耐えられるが、げんこつでなくったり、平手打ちされたり、一年生には大きな試練でした。あれほど憧れた中学校で、こんな蛮行が横行しているののでガツカリし、学校へ行くのに屠場へ引かれる羊のような恐怖を感じました。しかし、両親に無理に頼んで選んだ道で、今更弱音を吐く事も出来ず、だれにも言わないで朗らか

に振舞っていました。当時の軍国主義教育の一部分であったのでしよう。後年、軍隊生活の様子を聞いて、なるほどと納得した次第です。華やかな陰にはこんな厳しい面があることを教えられました。

通学は学生の遠足で三〇分かかる田畑の中の狭い道を東海道線の御油駅まで歩き、豊橋まで列車で行き、さらに約二〇キロ歩いて学校に到着する。毎日この往復の徒歩通学が私に取って、唯一の運動であったと、今日感謝しています。

家業を手伝うのが条件で進学させて貰ったので、家で静かに机に向かう時間はほとんどなく、帰宅すると、次から次へと仕事が出来ない。もちろん、両親も朝から晩まで、休みなし。定刻に食事出来るのは朝食だけで、後はちよつとした暇を見付けて立食したり、「三哺の礼」の故事ではありませんが、食事中にお客があればすぐに立つ生活でした。後になって、私が青年期に放とうに走らなかつたのは、両親がこのように真剣に働いている姿を見、直接触れて、両親の血と汗の結晶のお金で養われ、学費を送られてきた事が分かっていたから、だと思えます。

農村では現金収入が少ない。養蚕が盛んでしたが、繭の値段が急昇・急落し不安定でした。また、農作物は収穫物が売

れた時はお金がいりますが、それまでは現金収入がありません。それで農家の人を始め、一般の人々も月末、あるいは、節季払い（正月、お盆）が多く、年末、お盆の集金も一仕事で、私も手伝いました。

集金に回ると、その家々により、いろいろと教えられ、「人間の生きるとは」と基本的な問題を投げ掛けられた思いがしました。尋ね尋ねしながら目的の家に行くと、こんな遠方からまで買いに来てくれたのか、と驚く事もありました。粗末な家で、貧しい貧しい生活を見ると、集金の督促が出来なく、黙って帰った事もあり、ある家では「こんにちは」と声を掛けると「なんだ、何の用事か」と大声で怒鳴られる。「はい、伊川屋ですが」「なんだ、お金はないぞ、帰れ」。朝から酒を飲んで大威張り、店に来た時はベソかきながら、父に頼み込んで、助けてもらいながら、と腹も立って来る。しかし、実際、正直者が馬鹿を見る現実で、やるせない気持ちで酒を紛らわせていることを思うと哀れに思い、黙って帰る事も度々ありました。時には「御面倒掛けてすみません」とあつちこつちとかき集め、払ってくれるおばさんもあり、こんな時には端銭を負けて上げる事も多かった。農家の旦那でありながら、金払いの悪い人：など、社会の現実に触れ、私

の心の中に「生きるとは何で、どのように、何のために」と疑問が絶えずあり、将来に対する模索が始まりました。

私はお金のために、朝から晩まで働くのは空しい。何か他に人間の本当の生き方はないのだろうか。お金は人が生きるために便利な道具ではあるが、それが人生の全てではない。何かもっと大切なものはないだろうか。これが私の課題となったと思います。

中学校での勉強は自分で選んだ道ですから苦しくもあり喜びでした。英語の発音で一学期は鍛えられました。いま思えば、中学の先生はそれぞれ立派な専門家、学者だったと思います。私の一番困ったのは習字で、どうしても好きになれない。一生悪筆で過ごしてしまいそうです。幸い習字は中学二年で終わりました。

中学時代、予習復習のために机の前に座る時をもてない事がありました。そんな時は家から駄まで、駄での待合せ時間、等何時でもどこでも、本やノートを片手に予習復習したものです。「英語の単語を一日に五つ覚えたら、英語の問題は大丈夫だ」と言われて、毎日往復の時間を利用して暗記しました。それも三日四日と経つうちに失敗して出来なくなりました。こんな事を通して、人間の決心ははかないもので、どん

なに自分を鞭打つてもどうにもならない弱いものだと思し
らされました。「彼も人なり、我も人なり」、他人が出来るこ
となら、自分でも出来るかと頑張って挫折し、劣等感に押しつ
ぶされ、友達を見ると少しもそんな気配も見えない。それで
兄の本棚から、新渡戸稲造先生の『修養』という本を取出し
て読んだ。何とか修養してもっと意志強固になって、「為せ
ば成る、成らぬは人の為さぬなりけり」と実行力のある人間
になりたいと思いました。

ところがその本を読んで見ると、キリストの愛と信仰によ
る生活の事が書かれていて、私の期待することはありません
でした。特に、今わかるのは「山上の垂訓」であつたと思い
ます。右の頬を打たれるなら、左の頬も向けてやりなさい（マ
タイ五・三七）とあるように自我をなくすれば、自由になれ
る。自我があるために許せないで腹が立ち、けんかも起こる。
その頃、まだまだ短気で、よく兄弟けんかしては心のうちで
悔やんでいましたので、そうだと私も自我を放棄できたら幸い
だと思いました。

そんなある日、陽なたぼっこをしているとき、上級生につ
かまって、武道場の陰に連れて行かれ、「貴様、生意気だぞ」
と怒鳴られました。その訳がわかりません。「何が生意気で

しょうか」と問い返すと、「そんなことを言うから生意気だ」
と平手で叩かれました。そのとき、「山上の垂訓」を思いだ
して、そうだと、ここで自我を放棄しようと、もう一つのほお
を向けた所、火がでたようにひどく叩かれました。「しまった、
こんな痛い目に会うなら、『一つ叩かれたら、十叩き返せ』
と私ならいうのだが」と思いました。

その後、イエス様の救いにあずかって、十字架の深い意味
（一・ペテロ二・二一―四）を悟った時、信仰によって、十
字架に自我を放棄し、主のお言葉に従わせていただけよう
になりました。

私の郷里は東京に近いので、中学の卒業生はほとんど東京
の学校へ進学して行きます。西へ向かう小教者も京阪神まで
でした。つむじ曲りの私は「人が東に行くなら、わたしは西
へ行こう。遠く九州へ、特色ある明治専門学校（明専、現在
の九州工業大学）へ行こう」と決めました。

当時、国立の高等専門学校は医専以外は修業年限は三ヶ年
でしたが、当時の明専は四ヶ年
でした。「高等学校の二―三年の一
般教養は、やる気でやれば一ヶ年
で出来る。残る三ヶ年に大学と同



程度の専門教育によって、大学卒業と同等の実力をつける事が出来る」と創立者と総裁山川先生の意向で、「技術に堪能な士君子を養成する」との教育方針でした。

広いキャンパスに、教官・職員の仕事がありました。学生は全寮制で、「国爾、忘家、公爾、忘私」の四寮がありました。自治寮で、どこか精神的におおらかな環境でした。「国爾、忘家、公爾、忘私」とは「国のため、我家を忘れ、公のため、私を忘れる」との意味であると教えられました。国家主義的な教えとも考えられますが、私には創立者安川敬一郎氏が事業の収益を、自分個人のために用いないで、惜しげなく教育に投出し、公のために尽くしておられる事実が崇高な人間の生き方のように思われました。人は自分のためにどんな優れた知能があり、技術があり、富があっても他人には何の価値もありません。社会に、他の人々に役立つものこそ価値があり、意義があるのではないのでしょうか。

期待と希望に胸ふくらませて戸畑駅に降りて、失望しました。戸畑駅が小さな寂しい駅でした。こんな田舎へはるばる二〇時間余りもかけてこなければ良かった、と思いました。今更引返すわけにもゆかないので駅前へ出ました。明専入学案内の看板の所へ行くと、先輩が作業服に身を固め、かいが

いしく、行李、手荷物一切を車力に積んで寮まで明るく、楽しく、引張って行ってくれました。この先輩たちの心の温かさが私にやっぱりここに来てよかったと決心させました。

昭和四年の春、物理化学の教授として奥貢先生が着任されました。なにぶん手強い、難しい教科でしたので、奥先生も手強い先生だと思ひ込んでいました。教室や廊下でお目にかかる先生は、予想と違って、物静かで、柔和で、いつも嬉しそうにしておられました。何かお尋ねすると、よくよく分るように懇ろに教えてくださいました。先生は何時でも喜んでおられる。私もあんな喜びが欲しいと思っても、心に怒り、憤り、不平、不満があるので、すぐ険しい顔になってしまいました。

暮の一二月頃であつたかと思ひます。化学会の委員をしていました。その時の顧問が奥先生だつたと思ひます。「君達、冬休みに帰らないで寮に残っているなら、正月に遊びにきなさい。故郷の丹波栗のぜんざいを御馳走しよう」と招いてくださいました。数人で出掛けました。御馳走になって、いろいろ話の花が咲き、奥先生がクリスチャンと聞いたので、いろいろと迷論をもってクリスト教を攻撃しました。

ニコニコ笑いながら聞いて、最後に「榎本君、君はまだ神

様の事もわかっていない。君に神様を知らせていただくように祈って上げよう」と正座して手を組み、頭を深々と垂れて祈ってくださいました。私は祈りが何であるか知りませんが私もおなじ姿勢をしました。「神様、榎本兄弟はあなたが唯一の神様であることを知りません。また、救主イエス・キリストが分かっておりません。どうか、聖霊が兄弟の心の目を開いて、信じる者としてください。イエス・キリストの御名によってお願いいたします。アーメン」と目の前に神様の姿



奥 貢 先生

を見ているように、祈ってくださいました。私も確かに真の神様もイエス・キリストも知りませんので、心のうちで「そのようにしてください」と叫びました。この一言の祈りにこたえられて、私が救

われ、今日があるのだと思います。

その後、ある時、「榎本君、毎月第三木曜日に八幡で集会が開かれていますので来てみませんか」と誘ってくださいました。あまり行く気持ちがないので、宿題があつて行きませんが先約がありますので行けません、などと口実を設けてお断りしていました。口実の種も切れた時、「先生、私はキリスト

教では救われません」と断りました。「どうしてか」と反問された時、「あの教会、この教会と行きましたが、聞いている話は私と関係のない話で、何もなりません」。君、人が救われるのはキリスト教ではない。キリストによる福音で救われるのだよ。とにかく来てごらん」と言われて、案内されたのが高見町三丁目（当時高等官々舎と呼ばれていました）城さんのお宅でした。

お話は初心者である私には分りませんが、集会が終わる頃から、今まで重くのしかかっていた重苦しい悩みがすっかり消えました。帰る時は足取りも軽くなりました。ここには理屈抜きに、何かがあると思いました。それからは毎月の集会が待遠しくなりました。また集会に集っている一人ひとりが、平安と生命にあふれ、この冷酷な現実の中にも、こんな素晴らしい生き方があるのかと驚かされました。私が導かれたのは基督伝道隊福岡基督伝道館の家庭集会でした。それから毎月欠かさず出席するようになりました。

一二月の集会后、牧師さんが「榎本君、二五日頃はもう冬休みだろう。教会のクリスマスにに来て見ないか」と誘われて、クリスマスが何であるかも知らないで、ただ、サンタクロースがプレゼントを持って煙突から入って来て、良い子の枕許

の靴下に入れて行く、と言う童話と、クリスマスには七面鳥の丸焼きを食べるそうだが、位の事しか知りませんでした。

「教会のクリスマスを見てやろう」と出掛けました。

当時、戸畑から博多まで、蒸気機関車で約二時間かかっていました。やっと教会へ着くと、「今晚クリスマス祝会だから、飾付けを手伝って」と言われて、何をするのかサッパリ分りません。言われるままに手伝っていました。暗い中で夢のように美しいクリスマス・ツリー。部屋中、色のついたモールで飾られ、講壇のバックもできました。夕方、第一部の礼拝に続いて、日曜学校の生徒達の歌、聖誕劇、金言と幼い子達の喜びの力一杯の表現に感動させられました。集った会衆が皆明るく温かい人々で、冷たい、暗い現実の中にもこんな世界が残されていたのか、と喜びと安心を与えられました。

翌日は、大人のクリスマス感謝会です、と言われて出席してみました。一〇名もいたでしょうか。天井から裸電球が一つ下がって、その下で直径一メートルほどの大火鉢の回りに座り、暖房がないのでマントを引掛けたり、肩掛けを掛けたりしていました。牧師さんも一緒に座って、讃美歌・聖書朗読・短い説教・お祈り・讃美歌が終わって、茶菓がでる。皆がイエス・キリストによってどんなに救われたかを証して喜

び喜んで感謝していた。

翌日、牧師さんが「一二月三一日から五日まで新年聖会があるから出てきなさい」と勧めてくれました。新年聖会が何であるか知らないままで、断りかねて残りました。一二月三一日午後七時から一月一日午前一時まで、と一日から五日まで朝一〇時、午後二時、午後七時と毎日三回づつ集会が続きました。

まず聖書によって、神は唯一で今まで神と呼んでいたものは、この神によって創造されたものであり、真の神は見る事も、触れる事も出来ない方である。この神が聖霊によって予言者に書きとめさせた神の言が聖書であり、神がいかに真実で憐れみに満ちた神であるか、順々と説き明かされ、その神に対して、我々はどんな態度であったか、この神を神として、崇めない事が罪であり、罪を改めない限り神の怒りに会う…、段々恐ろしくなって、牧師さんに「大切な用事を忘れていたのでちよつと帰ります」と言ったところ、「聖会の途中で帰る馬鹿があるか」と一喝されて残りました。

その次の集会で神は人の罪を許すために、ご自分の独り子イエス・キリストを私達罪人が当然受ける刑罰である十字架に掛けて一切の罪を罰してくださいました。このイエス様が私の

罪のために死んでくださった、ありがとうございますと従えば完全に許して、神の子として受入れてくださる。

初めて、自分が神に対して恐ろしい罪人であり、そのために何もよい事ができない。その罪のために、私のような者を愛するがゆえに、神ご自身が独り子イエス様を十字架に罰してくださいました。独り子を賜ったほどに、そんな大きな愛で私のような者を愛してくださっていると知りませんでした。これ程の大きくて深い愛で、愛してくださる方があるなら、もう何もいらぬ。罪のために呪われて死んでいても当然の者です。私の知らない時から、愛のゆえに罪を罰して完全に許してくださいました。この事実を知らないばかりに、惨めな生涯を送ってきました。この神の愛を、神の許しをまだ知らないために、苦しんでいる人々に、一日でも早くしらせて上げたい、と神様の前に決心しました。

ただちに研究室の片付けをして、実験を辞退して身辺を整理し、「献身しますから、先生のところで修養生として訓練していただきたい」と強引にお願いしました。それから六〇年近く、神様に従わせていただきました。

異邦人であったルツが、姑ナオミについて参りまして、はからずもボアズの畑に導かれ、救主にあがなわれて、思いが

けず栄光の生涯へと変えられました様に、振り返って見ますと、神様のご愛の御手に導かれて、イエス・キリストに会い、この栄光と恵みの生涯へ入れていただきました。ただただ感謝です。

三 遣わされた当時の八幡



あなたがたは、さきの事を思い出してはならない。

またいにしえの事を考えてはならない。

見よ、わたしは新しい事をなす。

やがてそれは起る。

あなたがたはそれを知らないのか。

わたしは荒野に道を設け、

さばくに川を流れさせる。

私が八幡へ遣わされる時、ある先輩の牧師さんが、「北九州はひどい所だよ、特に八幡は人の住める所ではない。ただ製鉄所があるだけで、その従業員だけで、教養も無く、文化

施設もなく、まるで荒野の様な処だ、伝道はとても難しいよ。」と言いました。当時私は八幡がどんな所か知りません。ただ高見町の城様宅と集会所を提供して下さる河本様宅しか知りませんでした。然し「今より我は主なり、われ行はば誰かこれを止むる事を得んや。(イザヤ四三・一三元訳)と仰せになる主が遣わして下さる。(イザヤ四三・一八一―一九)八幡が荒野であつても、さばくであつても、主が新しくして下さる。神様らしい業を行つて下さる。荒野であり、砂漠であるからこそ、主の救いが要るのだ。」と思ひました。

当時労務者が彼方、此方で酔いつぶれて、路上に転がって居り、鉄粉で茶色の人、粉炭で黒い人、裸体で街路を闊歩しており、成程ひどい所だと思ひました。然し「石をもアブラハムの末と成す」主が業を成して下さる時、エデンの園の様にかえて下さるから恐れはありませんでした。

四 聖霊のバプテスマ

昭和七年一月二日(新年聖会第二日目)の午後二時からの聖別会で、カルバリの丘に建てられた三本の十字架、その中央の一番高く大きい十字架にバラバ(暴動を起こし、殺人強

盜等の罪を犯した重罪人)が架けられることになっていた。ところがそのバラバが許され、罪の無い主イエス様が架けられ、生命を捨てて下さった。バラバこそ私自身の姿であり、こんな罪人を許すため、神の御子イエス様が生命を捨てて下さり、墓に葬られ、三日目によみがえり、絶えず私の心の戸の外に立ち、叩きつづけて下さつてとがめ給わないで、私に心を開くのを待つていて下さったことを知り、父なる神と主イエスの御愛と忍耐に迫られました。

このように愛して下さつたのだから、もう充分、何もいらぬ、このお方のために生命を賭けて御愛に応えたいと、全身の愛に燃やされました。六〇年経た今も益々燃え盛つています。その集会の様子は使徒行法二・一―四そのままでした。一同に聖霊が注がれ、神の愛にみたまされ祈りと讚美で会堂が揺れ動いた様でした。

これが私の聖霊のバプテスマでした。イエス様を信するなら聖霊のバプテスマを受けなければ、イエス様を信じているとはいへません。(徒一九・一―七、一・コリント二一・三)然し聖霊のバプテスマは信仰に由つて受けるもので、感情やしるし、または状態ではありません。当時、年は若くても信仰によつて、聖霊が主の愛の火をもって、私を焼きつくして

下さいました。もう寝ても覚めても主の事が思い出され、立つにも座るにも、食べるにも飲むにも主の愛にみたされ、主の愛に押し出されて大胆に、主の愛に包まれて謙虚に、どんな事も主の愛により喜んでやり、毛頭、自分の考えはなくなっ
てしまいました。木は実によつて知ると主は仰せになつてい
ます。聖霊のバプテスマを受けたなら、その結果がすべての
面に出て、聖霊の実を結ばせて下さいます。(ガラテヤ五・
二二―二三)

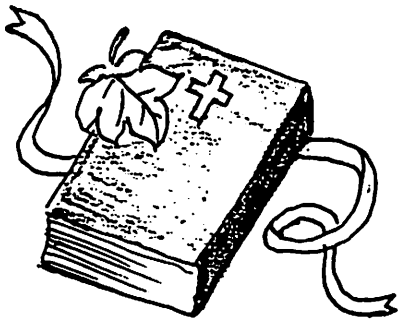
聖霊の働きの在る処には、必ずサタンが働いて信仰から私
達を反らす様にします。如何にも聖書の働きの様にしる
しを見せますが、異火を焚き主に呪われたダタンおよびアピ
ラムの様です(民数一六)。イエス様もバプテスマを受け、
聖霊に満たされ「わたしの愛する子、わたしの心にかなう者
である」と明確に神様のあかしを頂いたすぐ後、悪魔に試み
られました。(マタイ三・一六―四・一二)。

教会の歴史の中で、聖霊の働きが著しく、リバイバルの時
には必ず悪の霊の働きも激しいのです。そのため迫害が起こ
ります。聖霊のバプテスマによつて心の目が開かれ、聖霊の
働き、悪魔の働きを明らかに見分ける事ができます。

今日まで、私は聖霊のバプテスマを受けたあかしはしませ

んでした。言葉より聖霊の実が結ばれる事実が大切な事だと
思います。或る兄弟が「先生、私は〇〇年に聖霊のバプテス
マを受け献身しました。それ以来信仰生活に動揺はありません
ん、先生は聖霊のバプテスマを受けた経験をお持ちですか？」
と質問されました。「私の伝道牧会、私の生活の歩みを見て
判断して下さい」と私はお答えしました。

今も皆様が、ペンテコステの日の弟子達のように聖霊のバプ
テスマを受けて、主の火に燃やされ永遠の栄光にあずかる様
にと祈っています。



五 結 婚

結婚のすすめを受ける迄は、「主のこんな大きな愛に包まれて居るのだから、生涯独身でパウロの様に、大胆に、生命かけて福音を伝えて行き度い」と願って、その決意で御用に当らせて頂いて居ました。その頃、軍国主義、国粹主義一色でキリスト教に対して、ひどい偏見を持って居る人が多く、明治初期のキリスト教迫害に似た状態でした。それで單身なら、いざという時は殉教すれば良い、家族が居るとそれが出来なく成り、最後迄主に大胆に従えなく成るのではないか、又そんな道づれにしてはならない、と心に決めて居りました。青年ですから二、三、結婚の話もありましたが、使命を全うするのが総てですから、全部断りました。

牧会するからには、自分も家庭を持って、社会的にも信用されなければ伝道出来なく成る、又信仰もって家庭生活をして、主の恩寵をあかしする事が主の御用である、と言われて結婚する事に成りました。

「婚約者が居るか?」「主の前に白紙で委せるか?」と言われて、「婚約者はありません。主の御導きに従います」と答えました。今日若い人達の自由な交際の出来る時代には想

像も困難な事でしょう。「男女七才にして席を同じうせず」と男女の交際も禁じられて居たのでした。それで親や先輩が候補者を見つけ紹介して、仲人を立てて色々と言志表示をしたり、注文したり、その応答で相手を探り知る様でした。私は文字通り主に献身して居るので、主が与えて下さる人が、どの様な人でも使命に歩む人であれば、それで良いと心に決めました。

紹介されたのが福岡の末永の姪でした。末永の叔父、叔母は柘植師の京都聖会で主の十字架の御愛に燃やされて、めぐみを感じ、喜んで広大な土地、建物を福岡基督伝道館（現基督伝道隊福岡大濠公園教会）に献げて熱心に信仰に励んで主に仕えて居りました。その姪である本人とは教会で知っては居りましたが、信仰状態がどんなのかわかりません。又献身の生涯をどの様に理解しているか心配でした。

折滝師から「献身者だから結婚式が済む迄は本人に個人的に会ってはならない」と止められて居ましたが、あえて本人に会って、その決意を尋ねました。本人も不安を感じ、長い間主の導きを求め祈って、不安を一つ一つ聖言によって解決し最後に

わが義人は、信仰によって生きる。

もし信仰を捨てるなら、

わたしのたましいはこれを喜ばない。

(ヘブル 一〇・三八)

のみことばを与えられ主の御導きと信じて決断したとの事で感謝しました。

六 牧師の歩み

此の福音に与った時、聖書は今も生命の言葉であり、真理であり、恩寵であつて、主は信ずる者に対して聖書の通りに応えて下さる事を教えられました。従つて私共の信仰は聖書が基準で、信仰も、希望も、愛も、救いも、審判も、聖潔も、聖霊のバプテスマも総て聖書通りであります。

聖霊のバプテスマを受けて、強く迫られたのは(使徒一・八)です。主は現実に活きて、信ずる者に、こんなにくぐみと能力をもつて応えて下さる事を信じようとしなさい。知ろつとしなさい。昔は出来たかも知れない。夫れは過去の事である。此の科学的な現代人に取つて夢物語りに過ぎない、と生ける主を信じようとしなさい、崇めようとしなさい現実の中で「わたしの証人となるであろう」と焼ける様な御愛をもつて、証

人を求めて居られるのです。私も主の召しに應えて、聖書通りに主にお従いする決意をさせて頂きました。人が救われるのは、知識や理解ではなく、聖霊の働きに由るのです。(一・コリント 一・一七、二・四一七)

「あなたこそ、生ける神の子キリストです」(マタイ一六・一七)福音によつて生れ、永遠の生命に与かつた私共は、めぐみに感じ、喜びと感謝をもつて、生ける神に仕えて居ります。従つて総ての必要は「使徒たちの足もとに置いた」(使徒四・三五)とある様に、手放して主に献げられたもので総ての必要は満たされるのです、従つて生ける主の聖前に献げるものは総て無記名で献げられます(一・コリント 八・一一―一二、九・六一―九)従つて乏しいからと人に同情や援助を期待しないのです(ガラテヤ 一・一〇)。社会の変動を全面的に受ける、人間的には無防備な弱い教会の様ですが(二・コリント 一一・七―一二)の様に誰の負担にも成らず満たして下さいました。今後もなほ満たして下さいる事を信じて、前進させて頂きます。

今も教会は多くの無名の聖徒達が恩寵に感じ総ての面で分を越えて(レプタ 二二つを献げたやめめ女の様に)聖霊による喜びと感謝を以つて主に仕えて居られ、世の光である主を

崇め、讚美し、再び来り給う主を俟ち望んで居ります。

七 アメリカ・カナダ紀行

前田教会で信仰をもって励んで居られた西原ふくよ姉一家を問安する機会を与えて頂き度いと願って居りました。

一九七八年（昭和五三年）和義が留学いたしましたので、夏休みには時間ができると聞き出掛けていきました。

以前は海外旅行はきびしく規制されて大へんな事でした。初めての海外旅行で緊張していましたが、主が機に会う助けを与えて下さって無事に行く事ができました。飛行機の中で、隣の座席に山口県出身で、日本とアメリカの間を殆ど毎月往復されている佐藤兄がおられて、初旅行の私共にアメリカ入国、滞在の手続きの方法、生活の相違等、ねんごろに教え、そして、乗換便のターミナルビルまで案内してくれました。サンフランシスコで乗換えサテライトへ出ると、色の白い人、黒い人、黄色い人、丈の高い人、低い人、人種のるつぽと呼ばれるだけに色々な人を見て圧倒されました。

和義達がシカゴまできてくれましたので、後は気楽な旅でした。しばらくインディアナに滞在してカナダのトロントへ

行き、西原ふくよ姉の記念会をし、集会をしてそれぞれが堅く主を信頼して温かい家庭生活をしておられるので、主にあふるる感謝を捧げて帰途につきました。

ロサンジェルズで菊池姉をお訪ねし、その教会で礼拝の御用をさせて頂いて帰りました。信者の方々が悩みを訴えてこられました。アモス書にある様に「主の言葉を聞くことのみきさんである」と教えられ、いよいよ恵みに感じ、謙虚に聖書の聖言に堅く従って歩ませて頂きたいと思いました。

一九七九年（昭和五四年）和義が留学を終えて帰国するので、もう一度、アメリカへ行かせて頂きました。初めてのアメリカ本土に立った時は、さすがに広いなあと思いました。未だ実感になりませんでした。二回目は自動車でニューオーリンズまで行く事にしました。都市に入るとビルが林立していますが、郊外へ出ると次の街まで家を見かけないドライブがつづきます。（日本では家の見えないところは珍しい様ですが）またミシシッピー川口の広さ、水量のすごさはとても表現できません。

丁度、私達が聞くみことばも、実際にみことば通りに従った人だけが、みことばの生命にあずかる事ができ、主の恵みといつくしみ、栄光にあずからせて頂く事ができる事を教え

られました。

八 ヨーロッパ紀行

一九八〇年（昭和五五年）中学生の頃から夢に描きつづけたヨーロッパへ行く機会を与えて頂きました。

ロンドン空港に着いてサテライトから出ると、青い目のスチュワーデスが「お早うございます。お疲れ様でした」と、鮮かな日本語であいさつされびっくりし感激でした。ターミナルから大型バスで市内のケンジントン公園の傍のホテルへ向いました。

私達がこの地上での使命が終って憧れの聖国へ着く時も、御使い達に迎えられ、主イエス様が所を用意して下さっている父なる神様の家に迎えられるでしょう、その時の栄光を思い心躍る思いでした。

翌日パリのドゴール空港へ着き、パリ市内観光に回りました。ノートルダム寺院のバラのステンドグラス等、彫刻、建築、美術に歴史の重厚さを見せられました。ノートルダム寺院の樋の排水口が映画の「醜いせむし男」を思い出させました。祭壇の周囲には彩色された彫刻がはめられ、新約聖書の

イエス様の御誕生から十字架、復活、昇天までが彫刻されてきました。イエス様の姿は多くの人の手で撫でられて色も無くなっていました。これは農村の文盲の人達がイエス様に就いてお話を聞く時の教材（今日でいえば紙芝居の様なものでしょう）であった様です。イエス様の福音を伝えるための熱意が伝わってきました。

ルーブル美術館では、人類の貴重な遺産というべき美術品に直接対面すると、今まで複製品等で受けた感激と異なったり、やっぱり実物でなければ味わえない感激に圧倒されました。同様に、主イエス様について、耳で聞くより、本で読むよりも、聖書のみことばに直接生命をかけてお従いして味わう聖霊による喜びは、他では得られない尊いものだと思えられました。

スイスに行く時、誰かが「アルプス越えは危いからこわい」「いや、このツアーには牧師さんが一緒だから大丈夫」とささやいているのが聞えて、主が偕にいますして祝福のもととして下さっている事を感謝しました。

モンブラン観光の時「スイスは核戦争が起こっても、全国民が避難できる核シェルターができています」と聞かされました。見た目にスイスは華麗さはありませんが、この様な公共

資産に富んでいる事を知り感心しました。然し、核戦争では無く、必ず来るこの世の終りに対してどれ程の準備ができてゐるか？と考えさせられ、万全の備えを早くしなければならぬと、足元をゆさぶられました。

ローマでは広大な聖ペテロ寺院と呼ばれる会堂を觀ました。広大な敷地に大理石の壮大な建物、ミケランジェロ、ラファイエル……の壁画、天井画、大小様々な彫刻等、あかしとしてこの会堂を建てた人々の信仰を見せていただきました。

また、郊外にあるカタコンベを訪れ、ローマ皇帝の権力の迫害の中で、信仰を守り通した聖徒達の足跡を見せられました。また、コロシアムの遺跡——機械力も無い時代にあの石造りの大きな円形劇場を作ることが、どんなに多くの人の犠牲があつたかわかりません。その中でネロ皇帝に依つて、多くの信者が猛獸と闘わされ殉教したことを思いました。

今、そんな迫害も無いめぐみの日に置かれてゐる自分の信仰の歩みはこれでいいだろうか？（ローマ一二・一一二）

九 榎本利三郎 年譜

一九〇九年（明治四二年四月二八日）

愛知県豊川市国府町 商家「伊川屋」榎本久三、しなの三男として生まれる

一九一五年（大正四年四月）

国府尋常高等小学校入学

一九二二年（大正一〇年四月）

愛知県立第四中学校入学

一九二七年（昭和二年三月）

愛知県立豊橋中学校卒業

一九三一年（昭和六年四月）

明治専門学校応用化学科卒業

一九三二年（昭和七年一月二日）

聖霊のバプテスマ

一九三三年（昭和七年一月）

福岡大濠公園教会（折滝鶴治郎牧師）にて献身

一九三七年（昭和十二年）

この頃より八幡集会の御用を始める

一九三九年（昭和十四年一月三日）

八幡基督伝道館牧師として遣わされる

一九四〇年（昭和十五年一月五日）

末永二六、りえの長女 百合子と結婚

一九四一年（昭和十六年八月二日）

長男 俵雄 誕生

一九四一年（昭和十六年九月）

西南女学院非常勤講師となる

一九四二年（昭和十七年二月）

大戦始まる。教団に所属する

一九四二年（昭和十七年一〇月一〇日）

次男 和義 誕生

一九四四年（昭和十九年一月九日）

長女 咲子 誕生

一九四五年（昭和二十年八月八日）

八幡空襲により被災

一九四五年（昭和二十年八月一五日）

終戦

一九四五年（昭和二十年一〇月二五日）

百合子の郷里、長崎県南松浦郡上五島町浜の浦に疎開する。（和義 病

一九四七年（昭和二年一月）

気、海水沈入）

五島を引き揚げ八幡へ戻る

- 一九四七年(昭和二十二年九月)
- 西南女学院非常勤講師を辞める、
新会堂献堂式
- 一九四七年(昭和二十二年七月一六日)
- 三男 豊 誕生
- 一九四七年(昭和二十三年一月二日)
- 三男 豊 召天
- 一九四八年(昭和二十三年一月三日)
- 四男 恵 誕生
- 一九四八年(昭和二十三年一月一四日)
- 四男 恵 召天
- 一九五〇年(昭和二十五年四月二五日)
- 折尾女子高等商業学校非常勤講師と
なる
- 一九五一年(昭和二十六年三月一四日)
- 五男 誠 誕生
- 一九五二年(昭和二十七年)
- 宗教法人の認証を受ける
- 一九六六年(昭和四十一年四月)
- 福岡大濠公園教会代務者として御用
にあたる
- 一九六七年(昭和四十二年四月)
- 福岡大濠公園教会牧師として就任
- 一九六八年(昭和四十三年四月)
- 折尾女子商業高等学校非常勤講師を
辞める
- 教団より離脱
- 一九七三年(昭和四十八年四月)
- 前田教会牧師館新築
- 一九七四年(昭和四十九年九月)
- 前田教会新会堂新築落成
- 一九七五年(昭和五〇年三月)
- アメリカ、カナダ旅行
- 一九七八年(昭和五三年)
- アメリカ旅行
- 一九七九年(昭和五四年)
- ヨーロッパ旅行
- 一九八〇年(昭和五五年三月)
- 肺炎のため入院(第一回)
- 一九八五年(昭和五十九年一〇月)
- 大濠公園教会新築落成
- 一九八六年(昭和六〇年二月一日)
- 次男 和義 献身
- 一九八七年(昭和六一年二月)
- 肺炎のため入院(第二回)
- 一九八八年(昭和六三年四月)
- 福岡大濠公園教会創立六〇年記念礼
拝
- 一九八九年(平成一年六月)
- 五〇年記念誌編集委員会
- 一九八九年(平成一年一月三日)
- 創立五〇周年記念感謝礼拝
- 一九九〇年(平成二年)
- キリスト伝道会を離脱



榎本四兄弟



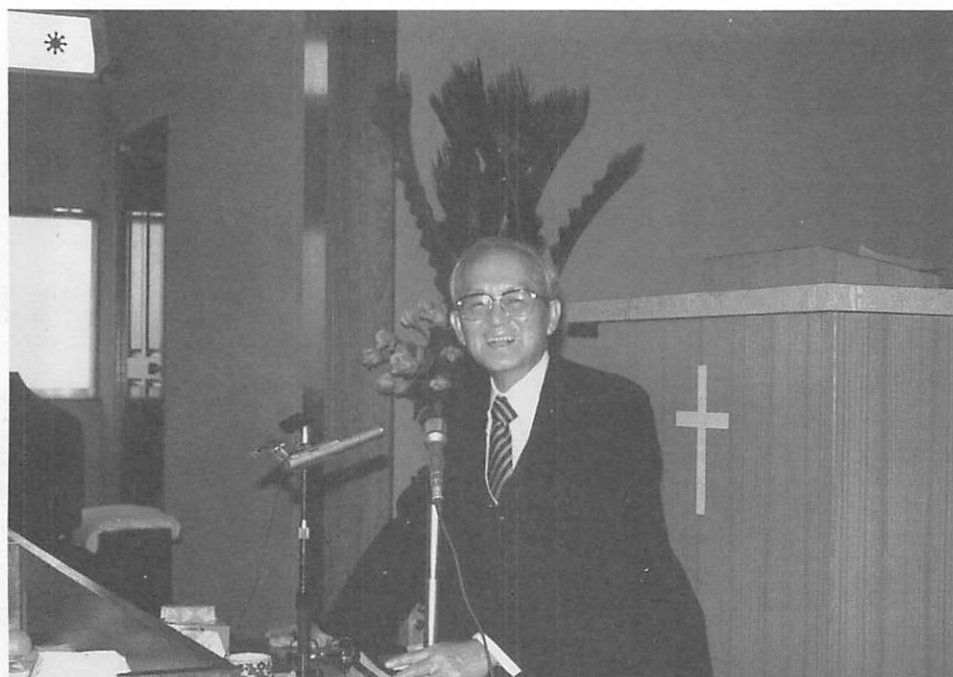
教会のアプローチと掲示板（病弱な誠を抱いて）



1983. 家族



miss Kaizerからのプレゼントの盛装



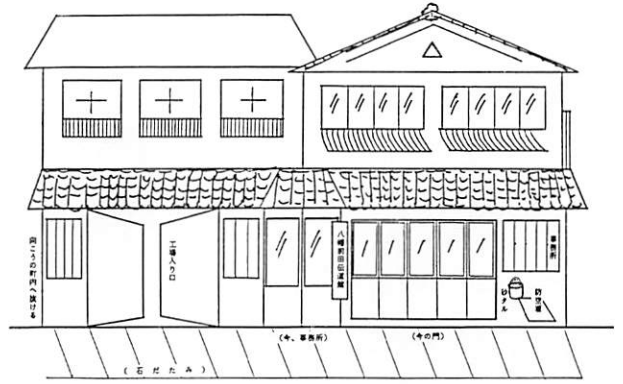
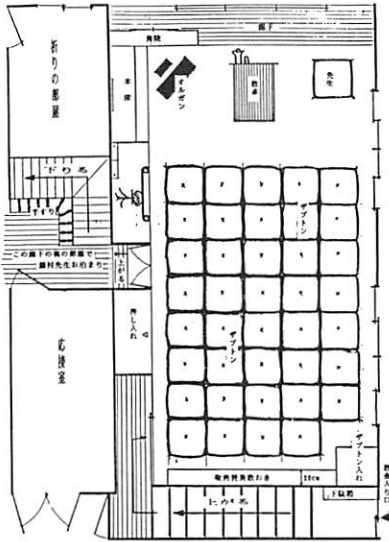
昭和62.3.1 全快感謝会



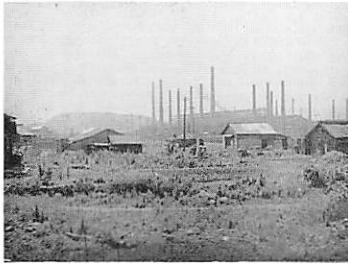
昭和63.1.1 新年聖会

写真で見る教会史

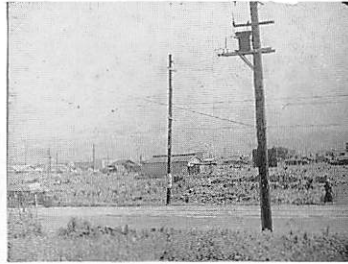
会堂の歴史



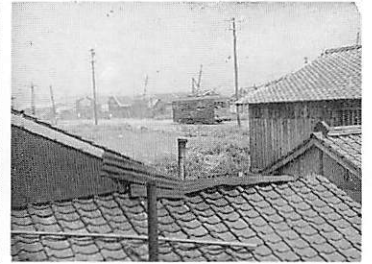
河本商店 2階時代



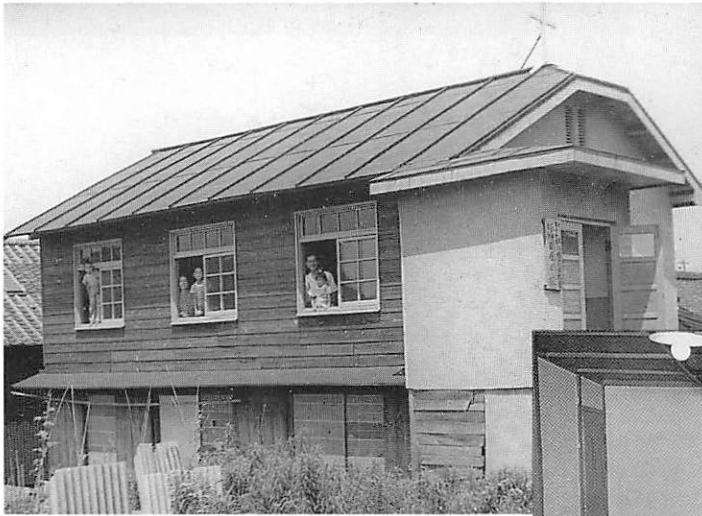
●昭和22年 会堂の東側



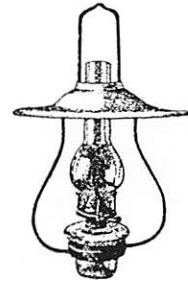
●玄関前(南側)



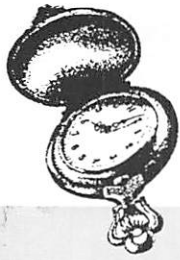
(東側)



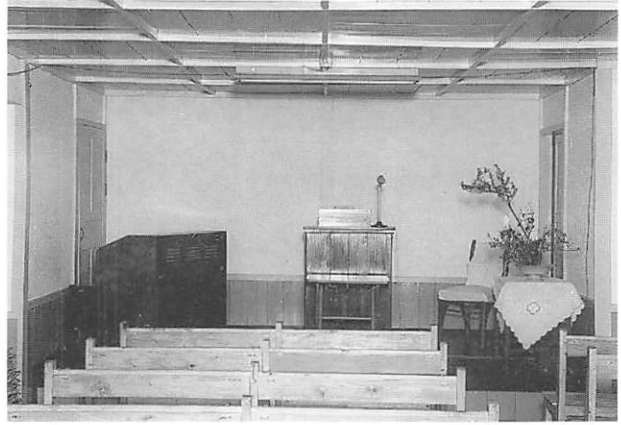
●昭和22年



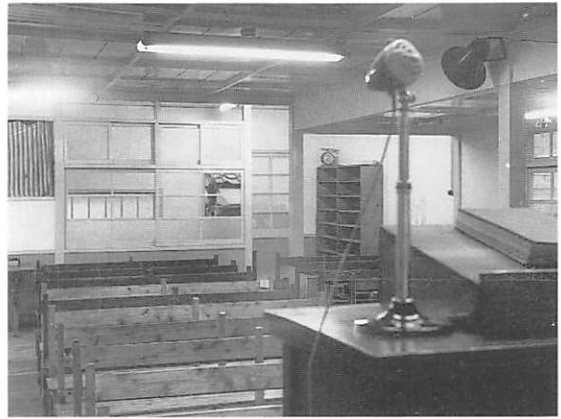
●昭和31年



●昭和33年



●昭和33年



●昭和33年



●現在 看板を新しく建替、会堂ライトアップ



●昭和50年 仮会堂



●昭和36年



●昭和36年



●昭和40年



●昭和44年



●昭和44年



●昭和44年

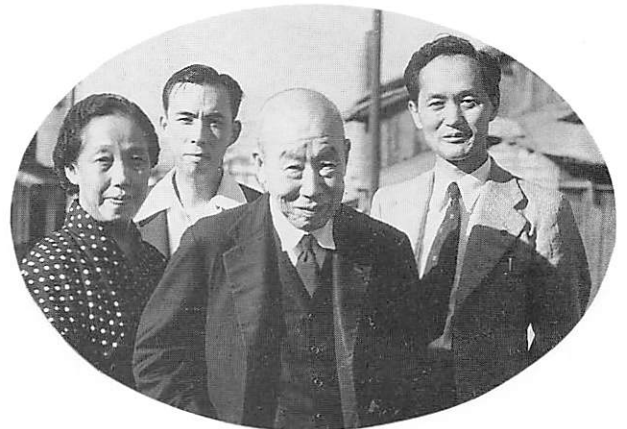


●昭和60年



●平成2年 聖会感謝会

●昭和31年 エッケル師



●昭和28年 藤村師を迎えて

協力宣教師



●昭和31年
エッケル師



●昭和35年 キースリー師

集 会



●昭和33年



●昭和31年



●昭和36年頃



●昭和42年 第1回海老津集会



●昭和62年 年末感謝会



●平成2年 木曜日



創立30周年 記念感謝会

昭和44年



創立40周年 記念感謝会

昭和54年



創立50周年 記念感謝会

平成元年



礼 典



●昭和36年

洗礼式



●昭和44年



聖餐式



●昭和46年

献児式



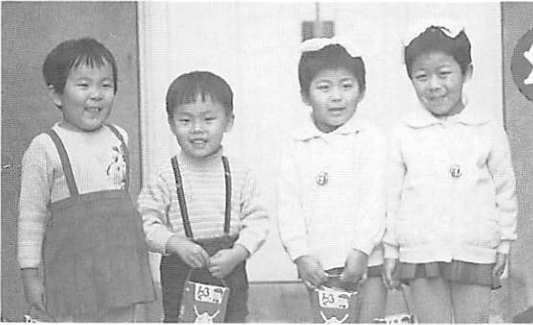
●昭和63年



●昭和63年

成人
祝福式

幼児祝福式



●昭和57年



●昭和59年



●昭和64年



●昭和63年

結婚式



●昭和22年



●昭和47年



●昭和61年

婚約式



●昭和49年

告別式



墓前礼拝



記念会



クリスマス



●昭和29年



●昭和31年



●昭和33年



●昭和31年



●昭和37年



●中央公民館にて

●昭和34年 クリスマス





●昭和43年



●昭和42年



●昭和43年



●昭和43年



●昭和51年





●昭和51年



●昭和51年



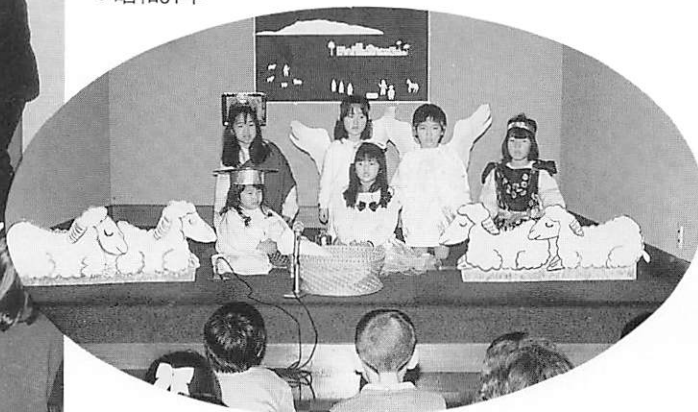
●昭和63年



●昭和63年



●昭和61年

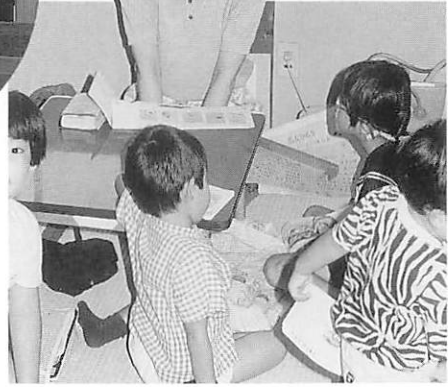


●平成元年

日曜学校



●礼拝



●1級



●2・3級男子



●2級女子



●3級女子



●女子高校

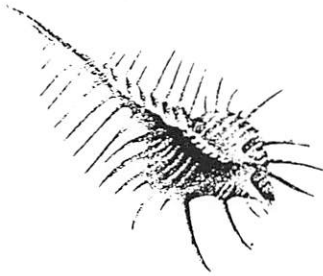


●西南中学

夏期学校



●昭和33年



●昭和35年



●昭和41年



●昭和63年



●昭和45年

各 会



青年会 ●昭和26年



サフラン会
●平成元年



エステル会例会 ●平成元年





信徒会修養会 ●昭和56年



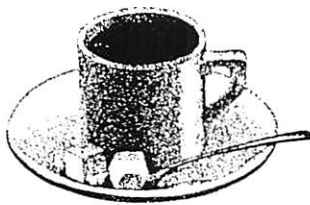
信徒会修養会 ●昭和52年



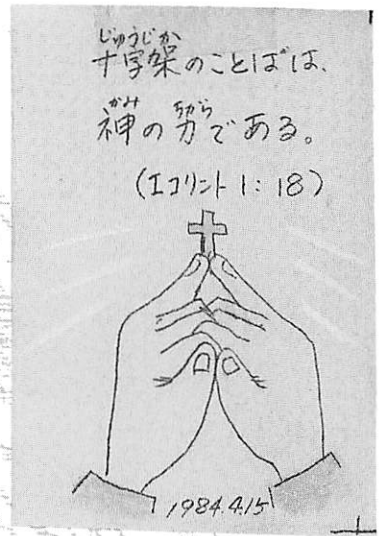
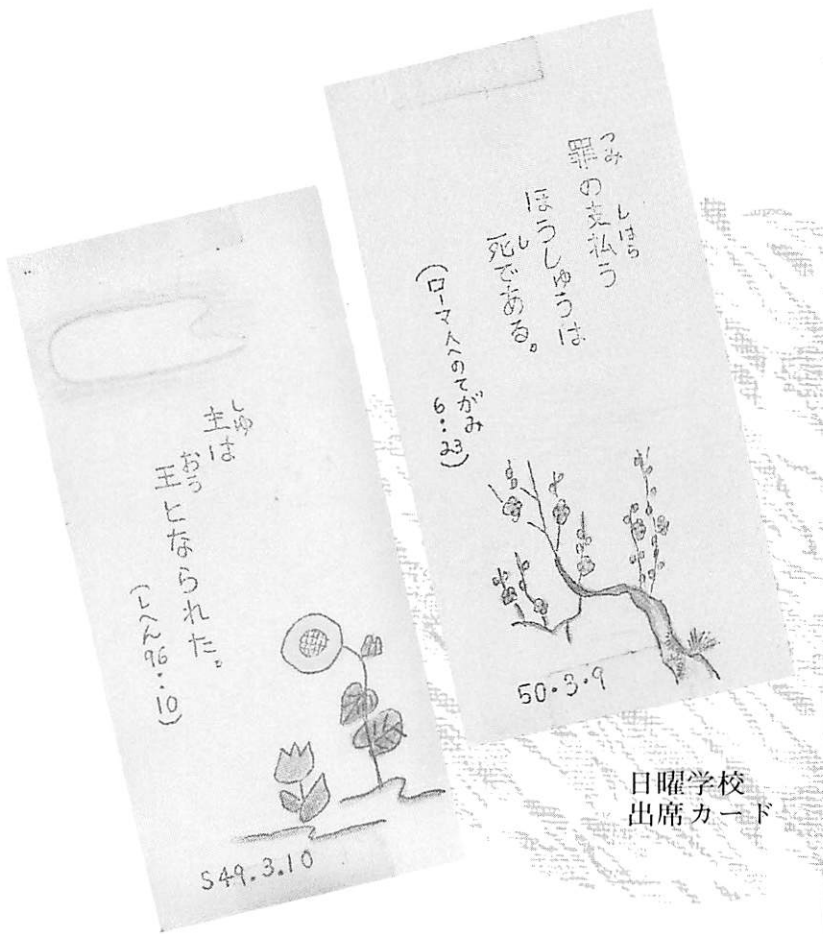
信徒会例会 ●平成2年



会堂掃除 ●平成2年



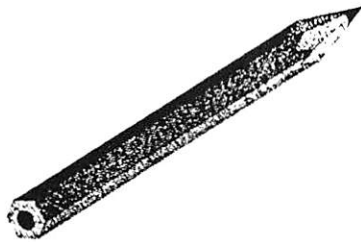
会堂生け花 ●平成2年



日曜学校
出席カード



編集委員会



各会のあゆみ

各会のあゆみ

信 徒 会

信徒会は、概ね三〇才以上の男子信徒が相互の交わりと信仰を高め合うことを目的として組織されているものです。

いつ頃から組織されたかは、はっきりしていませんが、おそらく高木兄や伊規須師たちが結婚されてから、昭和二〇年代の終わりか三〇年代初頃に、青年会から移行するような形で集いが持たれるようになったようです。

今は亡き大野兄や丸橋兄らが毎回欠かさず出席されていたことを思い出します。

五〇年代に入って出席者も増えてきました。

五三年に信徒会で一泊の修養会を持つとうという意見が出て、費用を積立てるようになりました。仕事を持っている人が多いので、遠くへは行けません、その年の九月に若松区岩屋にある簡易保険保養センターで榎本先生をお迎えして、第一回信徒修養会が開催されました。

日頃の仕事を離れ、自然の中に入って思い切り聖言に接し、寝食を共にしながら、夜の更けるままに語り合った幸いな時でした。

昭和五八年まで毎年開かれ、会場も直方いこいの村や下関の国民宿舎にも行きました。昭和五九年の時は、先生が入院されたため中止となり、以後開くことができませんでした。

現在、会員は二一名、毎月一回の定例会が持たれています。例会には、一〇名前後の方が参会されます。

会は二部に分かれて行われ、一部では榎本先生の御説教、二部では、会員のお証し、個人的な質問など、身近かな問題について先生の御指導をいただいています。

各人の信仰上の感想や意見、時に雑談も交えて、和やかな集まりです。

信仰経験のあまり変わらぬ者同志の集まりですので、先生の御指導も焦点のはっきりしたものとなり、私共年輩の者には、味わいの深い、特別の恵みが戴けます。

信徒の皆さんのお証しも、同様な経験の上に立った深い共感とともに、自分の歩みによい反省を与えられる貴重なもので、大変に恵まれます。

この信徒会が、一層主の喜び給うものとなり、祝福をいただきますよう、さらに毎日の歩みを励んでいきたいと願っております。

エステル会

前田教会婦人会の名称を、「エステル会」と名付けられたのは、昭和三七年頃だったでしょうか。会員の投票により聖書の「エステル記」からいただいた、このすばらしい名前と呼ばれるようになりました。

五〇年の教会の歴史と共に、会員一人ひとりが豊かな主の御愛と恵みに育まれて参りました。そして今、先に天にお召されになった良き先輩の姉妹方を忘れる事はできません。

河本かつ姉、島崎美知子姉、新原トミノ姉、加藤操姉、前田幸枝姉、林ハルエ姉、西原福代姉、磯部静子姉……

ただ一筋に主に信頼して勝利の足跡を残して下さった方々にならって、私達も又、若い世代に信仰の遺産を残させていただきたいと願います。

会の集まりは、毎月一回、礼拝後に持たれて来ましたが、最近では、部会が多いので、火曜日午前一〇時から開かれる時もあります。クリスチャンとして、私達が立たされている日常生活の歩み方、又主婦であり、妻であり、母であるそれぞれの置かれた立場での信仰の歩み等、聖書により適切な御指導をいただきます。霊の糧（説教）をいただいた後は、姉

妹方の生活の中でのさまざま問題によるおあかしを通して、更に恵みをいただきますが、一人ひとりの重荷は、会員みんなの重荷として、お互いに折り合いながら、「喜ぶ者と共に喜び、悲しむ者と共に悲しむ」とありますように、主の御愛によって結ばれた集まりであります。

この教会で、信仰生活を続けておられる御婦人方は、「エステル会員」となっておりますので、古い方も、新しい方も、励んで集会に出席下さいますようにおすすめ致します。

又二年に一回、一泊研修旅行も行われています。先生御夫妻と、主にある姉妹方、そしてその中心には主イエス様が一緒です。家事一切を離れ、宿でのくつろいだ三回の集会、聖言によって明日への活力をいただき、又自然とのふれ合いで、造り主を覚える機会ともしていただき、常日頃ゆつくり主にあつてのお交わりのできない姉妹方と語らい、祈り、感謝と讚美の時を持たせていただいております。本心に心楽しい旅です。どなたもご参加下さい。お誘いいたします。

今まで研修旅行の足跡を、思い出すまま書いて見ます。

※昭和四九年六月（久留米―日帰りの旅） 参加人員一九名

※昭和五〇年一〇月 由布院

参加人員 九名

※昭和五一年五月 都城丸山家 周辺

参加人員二一名

※昭和五五年五月 青海島 秋芳洞

参加人員一六名

※昭和五八年六月 倉敷 岡山

参加人員一五名

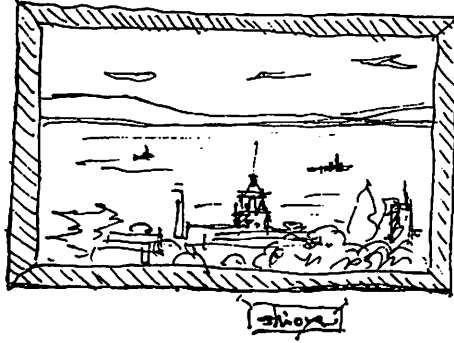
※昭和六一年五月 足立美術館 松江

参加人員一六名

※昭和六三年五月 雲仙

参加人員二〇名

以上エステル会について簡単に御紹介いたします。



青年会（サフラン会）のあゆみ

戦後会堂が与えられて、いつ青年会が誕生したか、その時期は定かではありません。最初の内は若い人のグループといたったものでした。今日と違って、当時は生きていくのが精一杯の時代でしたから、組織を作って活動するという余裕はなかったのかもしれませんが。

先輩達に尋ねながら、そのルーツをたどってみると、教会ができた当初は、河本実兄や野村末義兄達を中心となっていたようです。当時、西南女学院の今西先生がコーラスの指導をしておられ、教会の上の方にあつた家政女学校の生徒が一〇数名来ておりましたが、青年会の宿命といふべきか、リーダーの結婚と共に生徒達も来なくなりました。そのすぐ後に来たのが岩隈姉、今本（現中村）姉たちです。これらの方々がいわば第一期生といえます。

昭和二五―二六年に熊畑兄、高木兄、伊規須兄、山下兄、東兄、東（現伊規須）姉達に加わり、第二期黄金時代ともいふべき時期を迎えます。各集会に励み、日曜学校の御用、路傍伝道、クリスマス祝会、キャロル、会堂掃除など教会の中心となって奉仕しました。この時も青年会というものではな

く、奉仕のグループ、交わりのグループといったものでした。

第二期生が結婚して、信徒会の方へ移行していった昭和三〇年代は、中心的人物がいなくなりました。いつの頃からか男子青年は信徒会へ、女子青年は自分達だけで集まりをもつようになりました。その時のグループが西原姉、萩原姉、内海姉、渡瀬姉、小野姉、榎本（民）姉、野村（美）姉、調姉達で、男性群として正野兄、尼田兄、榎本（俣）、榎本（和）兄、これらの人達が第三期生ということになりました。

昭和四一年、静岡県御殿場で開かれた活水の群の第一回全国青年研修会に出席した何人かの呼びかけで男女共同の青年会が結成され、今日に至っています。

活動としては、聖書研究やクリスマス祝会での劇キャロルのほか、教会誌「ぶどうの木」の編集（一時期印刷、製本）も行いました。青年研修会にも二回くらい参加しました。

その後世代も変わっていき、尼田兄、安東兄、野村（仰）兄、大口兄、水村兄とリーダーもバトンタッチされていきました。

思い出としては、昭和四一年頃宗像郡神湊の民宿で、榎本先生を迎えて青年会の研修会を開きましたが、大変恵まれた集会で印象深いものとなっています。

その頃、教団の地区青年会との交流は、信仰上の違いもあってほとんどしていませんでしたが、ある時、地区青年会の役員達が来て、交流の時をもったことがあります。信仰について意見交換をしましたが、信仰がかみ合いません。地区の教会が聖書の信仰からはなれ、神学的信仰、社会活動的信仰となっていることを実感として知りました。ある役員が「あなた達は本当に聖霊を信じているのか」と真面目に問うので、わが青年達はア然としてしまいました。そして、自分達に聖書を生ける神の言として信ずる信仰が与えられていることを改めて自覚し、感謝したものでした。

今の青年会は、二世三世も多くなりました。指導も和義先生にしていたいています。

今日、世の中は不確実な時代と言われ、急速に変化して確かなるものが見失われています。こういう時代にあつて、主にある青年達、そして青年会が、永遠に変わらない聖言を信じ、これに従って確かな歩みを続けてほしいと心から願っています。

（あるOB記）

日曜学校

一 当教会の日曜学校は、昭和一三年頃、八幡基督伝道館で、午後一時半から行なわれるようになったのが始まりである。

二 昭和一四年一月三日、榎本先生が着任されてからは、午前九時から始まるようになった。

当時の生徒は、主として近所に住む子供たちと、河本商店の従業員の子供たちであった。礼拝のために備えられた四〇枚ばかりの座布団を投げ合ったり、重ねて飛び降りたりして、天真らんまんぶりを発揮していた。

クリスマスや遠足は、いつの時代にも生徒たちの楽しい思い出となっている。始め頃の遠足の模様はいかにもものどかである。「前田教会日曜学校」と書いた旗を先頭にして（途中まではバスや電車を利用したらしい）野や山へ文字通り歩いて行った。その先頭に立つ榎本先生のダンディな服装が興味深い。「ハンチングをかぶりブレザーにネクタイ、ゲートル姿」と、畠山英子姉が河本かつ姉の記念誌に書いている。

三 昭和二〇年八月八日に八幡は大空襲に見舞われて、八幡基督伝道館も焼失し、各集会が休会となった。

四 昭和二二年九月七日教会献堂式、礼拝の前に午前九時か

ら日曜学校（以下CSと略す）も再開された。この日の生徒数は七名、河本実兄の司会で、ご用は榎本先生が当たられた。その後は、野村末義兄と三人で続けられたが、三か月足らずで小学校高学年の生徒数が増加の一途をたどり、翌年一月末から一級と二級に分級することになった。一級は岩隈姉が担当（昭和二五年三日まで）し、以後、牧師夫人が担当した。

五 昭和二六年一〇月に東俊郎兄泰子姉、伊規須太郎兄、高木敏夫兄が受洗してCSの教師となられ、同時に教師もこちらの方々と交替した。

生徒たちの成長に応じて三級が新設された。当初は男女同級であったが、後に三級男子、女子とに分かれ現在に至っている。

昭和三二年頃、折尾女子学園の生徒を中心とする第一礼拝（午前七時四〇分）が持たれるようになった。旧会堂が取り壊されるまで続いた。

新会堂になって、梅光、折尾、西南合同の高校生クラスが他のCSと同様に午前八時三〇分から持たれている。

ちなみに、現在のCSの級分けを紹介すると、

一級（幼児～小三） 教師 林姉、小松姉

二級女子（小四～小六） 教師 高木姉、野村兄

二、三級男子 (小四―高三) 教師 上島兄

三級女子 (中―高) 教師 岩隈姉

西南中学 教師 藤掛兄、榎本姉

高校生(梅光・折尾・西南) 教師 林兄、正野兄

となっている。

六 クリスマス祝会は、一月二五日に午後六時から(二五日が聖日の年は午後二時から)持たれていた。昭和四二年に榎本先生が、大濠公園教会を兼牧されるようになってから、聖日の午後に固定されるようになった。場所も、手狭になつたため、昭和三四年からしばらく公民館を借りて持たれるようになった。

七 夏期学校は、昭和三三年から津屋崎教会を借りて、二泊三日で行なわれ、昭和五年まで続いた。やがてこの場所を借りることが困難になり、皿倉山で一泊のキャンプを試みたり、河内や畑のケヤキ谷で一日夏期学校が持たれてきた。

平成元年、教会において一、二級を対象に(八月一四―一五日)一泊二日の夏期学校が持たれ、子供達は大喜びで教会に親しみを覚えるようになった。続いて、海の中道青少年の家において中、高生サマーキャンプが八月一七―一九日、二泊三日で行なわれた。(大濠と合同)

八 教会外でのCS

A 昭和二三年東郷の吉武九兵衛兄宅で月一回(火曜日)家庭集会の前に行なわれ、榎本先生がご用に当たられた。五年ほど続いたようである。

B 昭和二四年熊畑恒男兄による青空子供会が約一年持たれた。

C 昭和二六年―昭和五年まで東俊郎兄、泰子姉による月曜学校が夕方持たれた。住所が変わつたために、場所も西水道町の借家から黒崎保育園に移った。

D 昭和二八年天神町二丁目の三好喜代市兄宅で、家庭集会の前に午後六時から東俊郎兄、伊規須兄によって行なわれた。(期間と曜日は不明)。

E 昭和三〇年泉町二丁目(現在の帆柱町)木田百代姉宅で、午後六時から高木敏夫兄によって、約三年間行なわれた。

F 昭和三三年戸畑の加藤雪典兄宅で約二年間土曜日に行なわれた。

G 昭和四四年八幡の児童相談所において、日曜日の午後二時から、調悠子姉、岩隈姉によって、約八年間行なわれた。以上、記されていることは五〇年の歴史の一部にすぎないが、多くの人々が様々な時と所において聖霊の感動を受け、

榎本先生の祈りのもとにご用にあずかせていただいていることを知り、今更の如く主の恵みと祝福を感謝するところである。



教会年表

教会年表

年 度	「主」のメッセージ	教会の歩み	一般世間の状況
昭和十四年		十一月三日 榎本牧師着任 八幡基督伝道館発足	五月 米穀配給統制法実施 五月 ノモンハン事件、日ソ両軍衝突 七月 国民徴用令公布 九月 第二次世界大戦始まる
十五年		二月九日 基督伝道隊八幡教会設立願提出 十一月五日 牧師夫妻結婚式、於福岡	五月 ダンケルク総退却。六月フランス降伏 八月 救世軍を教世団と改め、英国本部と絶縁。キリスト教各派合同し、純正日本キリスト教会結成、 十月 大政翼賛会発足
十六年		新年聖会は福岡で 日本キリスト教団八幡長者町伝道所として発足 西南女学院講師（聖書）	一月 推薦制翼賛選挙法発表 六月 独ソ開戦 十二月 言論、出版、集会、結社等臨時取締法実施 真珠湾攻撃太平洋戦争開戦
十七年	一、言葉は即ち神なり。 二、ことばを行なう者となるべし。 三、天地は失せん。されどわが言葉は失せじ	新年聖会 クリスマス礼拝	五月 翼賛政治会発足、企業整備令施行 六月 ミッドウエー海戦 八月 米軍ガダルカナル島上陸 九月 スターリンググラーヴ戦
十八年	一、真理と柔和と正しきとの為 ^{まこと} に威をたくましくし、勝を得て乗りす、ゆ、汝の右の手汝に畏るべきことを教えん。 二、若子よ、汝らは神より出でし者にして既に彼らに勝てり、汝らに居給う者は世に居る者よりも大いなればなり。 三、力は神にあり。	新年聖会 クリスマス礼拝	二月 ガダルカナル日本軍撤退、スターリンググラーヴ独降伏 五月 アッツ島守備隊玉砕 十二月 徴兵年令一年引下げ、学徒兵入営

ヨハネ 1・1
 ヤコブ 1・22
 マタイ 24・35
 詩 45・4
 1ヨハネ 4・4
 詩 62・11

十九年

一、今はエホバの働き給うべきときなり。
二、汝らわが愛に居れ。
三、神はわれらの避けどころ又力なり。
詩 119・126
ヨハネ 15・9
詩 46・1

二十年

二十一年

二十二年

新年聖会
クリスマス礼拝

八月八日 教会、牧師館被爆全焼

新年聖会できず休会

一月 西南女学院のぞみ丘宿舍入居
九月七日 会堂献堂式 礼拝二時から
説教榎本牧師 司会河本実
九日から早天折禱会火↓土六時から
十一月六日、二十日東山町家庭集会中原宅
十一月二三日みぎわ発行第一号
十二月 クリスマス礼拝、祝会
十二月二八日パプテスマ海江田昭夫、海江田朝子

一月 防空法による疎開命令
六月 米英軍ノルマンジー上陸 七月サイパン島陥落
学徒動員令施行
関門海底トンネル全線開通
十二月 B 29 東京初空襲

四月 米軍沖繩上陸 五月独軍降伏
八月 広島・長崎に原爆投下、ソ連参戦、八幡市空爆
ポツダム宣言受諾、終戦の大詔、戦時中全教育
令廃止
九月 降伏文書調印

一月 天皇神格否定の詔書、軍国主義者公職追放
二月 金融緊急措置令公布(新円切替)
四月 婦人参政権初行使
十月 農地改革実施、

一月 全官公労二・一ゼネスト宣言、GHQ禁止
六月 第一回国会学校給食始まる
キヤサリン台風で関東大水害

一三年

一、主は我らの為に命を捨て賜えり。
二、汝ら静まりて我の神たるを知れ
三、義人は信仰によりて生くべし。
1ヨハネ3・16
詩46・10
ロマ1・17

一四年

一五年

一六年

新年聖会 (一日礼拝、二、三日聖別会)

三月九日 東郷家庭集会 吉武宅

四月八日 バプテスマ 於大蔵川

九橋幸市、河本信生、林宏、中原昌子

上月富士子、中原真澄美、今本光恵

高橋京子

六月十日→十三日

教会新築記念特別集会 末永弘海牧師

四月十八日 バプテスマ 高橋英男

新年聖会

クリスマス礼拝、祝会

新年聖会

クリスマス礼拝、祝会

新年聖会

十月二日 バプテスマ 於大蔵川

伊規須太郎、東俊郎、東泰子、高木敏夫、

橋井政敏、山中忠義、廣瀬みさお、藤本英子

福岡

クリスマス礼拝、祝会

一月 帝銀事件、新民法実施

十二月 東条英機ら刑死

一月 法隆寺金堂炎上壁面焼失

四月 単一為替レート決定

五月 年令を満年令に改める

十月 中華人民共和国成立

十一月 湯川秀樹ノーベル賞受賞

十二月 インドネシア共和国成立

五月 天皇陛下御来朝

六月 朝鮮戦争始まる。

七月 金閣寺炎上

第一回ミス日本山本富士子

新聞、通信、放送レッドバージ開始

四月 マッカーサー解任、リッジウェー就任

七月 日本航空会社発足、朝鮮休戦会談開始

九月 サンフランシスコ対日講和会議

二七年

一、今より我は主なり我行わば誰か止どむることを得んや。
イザヤ43・13

二、神はそのひとり子を賜うほどに世を愛し賜えり、すべて彼を信する者の亡びずして、とこしえのいのちを得ん為なり。
ヨハネ3・16

三、汝ら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ
ヨハネ14・1

二八年

一、主は我らの為にいのちを捨て賜えり、これによりて愛ということを知りたり。
1ヨハネ3・16

二、みよ我戸の外に立ちて叩く、人もし我が声を聞きて、戸を開かば、我その内に入りて彼と共に食し、彼もまた我と共に食せん。
黙3・20

三、各々己が事のみを省りみず、人の事をもかえりみよ。
汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。
ピリピ2・4-5

二九年

一、汝の足よりくつをぬぐべし、
出エジプト3・5

二、エホバ、エホバあわれみあり、めぐみあり、怒ることの遅く、めぐみと真の大いなる神
出エジプト34・6

三、我らは活ける神の宮なり。
2コリント6・16

三十年

一、愛する者よ、我等いま神の子たり。
1ヨハネ3・2

二、事を行なうエホバ、事をなして之をとぐるエホバ
エレミヤ33・2

三、汝ら静まりて、我の神たるを知れ
詩46・10

新年聖会

四月五日 宗教法入法による「日本キリスト教団八幡前田教会教会規則」作成、知事及び教団へ申請

請

十月 藤村社七師聖会

十二月 クリスマス礼拝、祝会

新年聖会

一月二六日 鷺田家庭集会

(四十二年三月二十六日迄)

三月六日 東郷家庭集会

七月二十日 英彦山修養会

十月二日-二六日 藤村社七師聖会

十二月 クリスマス礼拝、祝会、除夜会

新年聖会

四月十九日 バプテスマ 於紫川

三好喜代市 内宮 酒見

十二月 クリスマス礼拝、祝会他

新年聖会

四月十日 バプテスマ 於紫川

木田百代、野村美恵子、筑山文彦、筑山寿々子

加藤千代、安部タマエ、中村美恵子

クリスマス礼拝、祝会他

二月 エリザベス女王即位

七月 ヘルシンキ五輪大会戦後初参加

十一月 アイゼンハワー大統領当選

明仁親王立太子

日航機「もく星号」三原山で遭難

二月 NHKテレビ放映開始

六月 北九州・筑豊大水害

真知子巻・八頭身、洗脳などの言葉流行

伊東絹子、八頭身美人

三月 ビキニ原爆実験、第五福竜丸事件
(死の灰問題)

九月 洞爺丸事件、(青函連絡船)

八幡丸物デパート(旧九九)発足

三月 九州厚生年金病院 開院

四月 チャーチル引退、イーデン首相に就任

八月 八幡駅移転新築完成

宇高連絡船「紫雲丸」沈没

三二年

一、娘よ聞け、目を注げ、汝の耳を傾けよ 詩45・10
二、聖靈に感ぜざれば、誰も「イエスは主なり」と言う能わず 1コリント12・3
ヨハネ21・22
三、汝は我に従え

三三年

一、みよ、我新しき事をなさん。頓て、おこるべし イザヤ43・19
二、我なんじのとがを、雲の如くに消し、なんじの罪を霧の如くに散らせり。 イザヤ44・22
三、御霊を消すな。 1テサロニテ5・19

三四年

一、地の果てなる諸々の人よ、なんじら我を仰ぎ望め イザヤ45・22
二、聖靈汝らの上に臨むとき、汝ら能力を受けん 使徒1・8
三、彼らの王その前に立ちて進み、エホバその頭に立ち賜うべし ミカ2・13
一、我は全能の神なり、汝わが前にあゆみて全かれよ。 創17・1
二、民よ、いかなる時にも神により頼め、そのみ前に汝らの心を注ぎいだせ 詩62・8
三、事を行うエホバ、事をなして、これをとくるエホバ、その名をエホバと名のる者 エレミヤ33・2

新年聖会
クリスマス礼拝、祝会

新年聖会

四月二九日 バプテスマ於紫川
本庄信子、有働幸江、樋口南子
九月十九日―二十一日 献堂十周年記念聖会
クリスマス礼拝、祝会

新年聖会

四月七日 バプテスマ 於紫川
西原文江、西原和子、佐藤和子、丸山雪夫、丸山恵美子
四月十四日 バプテスマ 高岡愛子、篠
四月二日 柴原トヨ
八月五日 戸畑家庭集會戸畑伝道所となる
十月 会堂増築(三十三万円)
十一月一七日 バプテスマ 中原光子
十二月 クリスマス礼拝、祝会

新年聖会
五月十一日バプテスマ 於紫川 萩原恵子
六月八日 特別集會 末永師
十二月二五日 クリスマス礼拝、祝会 於中央公民館

三月 筑豊電鉄貞元中間電車開通
十月 ソ国交回復

南極観測隊南極上陸 昭和基地設定
十月 ソ連世界初の人工衛星スプートニク一号打上
帆柱ケーブル営業開始

一月 人工衛星打上(アメリカ)
三月 関門国道トンネル開通
十二月 一万円札発行

四月 皇太子結婚式
九月 伊勢湾台風(死者五千)
井筒屋八幡店開店

三五年

一、汝ら雄々しけれ懼るゝなかれ
イザヤ 35・4
二、神来たりて、汝らを救ひ賜うべし
イザヤ 35・4
三、汝ら諸々の聖徒よ、エホバをいつくしめ
詩 31・23

三六年

一、イエスの血すべての罪より我らを潔む。
1ヨハネ 1・7
二、深からずば主を見ること能はず。
ヘブル 12・14
三、我常にエホバをわが前におけり、エホバわが右にいませば、我動かさるゝことなかるべし。
詩 16・8

三七年

一、今より我は主なり、我行わば誰か止どむることを得んや
イザヤ 43・13
二、地の果てなる諸々の人よ、汝ら我を仰ぎ望め、さらば救われん。
イザヤ 45・22
三、イエス・キリストは昨日も今日も永遠までも変りたまふことなし。
ヘブル 13・8

新年聖会

三月二日 バプテスト 於紫川
榎本俊雄、内海富子、下川薫子、梢、宮崎

九月四日 戸畑伝道所献堂感謝会 於戸畑伝道所

十二月二日 永犬丸家庭集會 海江田宅

十二月 クリスマス礼拝、祝会 於中央公民館

新年聖会

四月三日 バプテストマ 於紫川
榎本和義、尼田隆巳、伊規須富夫、正野真宏

正野隆土、小野道子、綱悠子、永谷悦子
会堂外装改修（八万五千円）

六月一日―四日 聖会

九月二五日 教会改修工事開始

十二月二五日 クリスマス祝会 於中央公民館

新年聖会

四月二三日 バプテストマ 於大蔵川
林知夫、林ハルエ、林正二郎、林信一

林磨璃子、渡瀬美紀子、上島南洋美
江島嘉津子

九月九日 献堂十五周年記念礼拝

十二月 クリスマス礼拝、祝会 於中央公民館

一月 自民党新安保条約单独強行採択
金学連アモ・樺美智子死亡

四月 賀川豊彦召天

八月 ローマ五輪大会

十一月 浅沼委員長、右翼少年に刺殺さるゝ、NHK、
民法四局カラーテレビ放送開始、折尾公園住
宅地化に決定

四月 人間衛星船成功（ソ連）

二月 北陸地方豪雪

八月 東西ベルリン交通制限
日紡貝塚女子バレー欧州で連勝、東洋の魔女

二月 人間衛星船成功（アメリカ）

北陸トンネル開通（二三、八六九米）
堀江謙一ヨット太平洋単独横断

九月 若戸大橋開通

三八年

一、永久に在ます神は住み家なり。下には永遠の腕あり。

申 33・27

二、なんじらエホバのめぐみ深きを味わい知れ

エホバにより頼む者は幸いなり。 詩 34・8

三、見ゆるところによらず信仰によりて歩めばなり。

2 コリント 5・7

三九年

一、みよ、神はわが救いなり、我よりたのみて、おそる、
ところなし。

イザヤ 12・2

二、力は神にあり。 詩 62・11

三、汝の能力は、汝が日々を求むところに従わん

申 33・25

四十年

一、あなた方はこの世では悩みがある。然し勇氣を出し
なさい。私は既に世に勝っている。 ヨハネ 16・33

二、見よ。私は世の終り迄、いつもあなた方と共にいる
のである。

マタイ 28・20

三、主にあつて堅く立ちなさい。 ピリピ 4・1

新年聖会

四月十五日 バプテスマ 於大蔵川

太田邦子、三好千代子

九月二九日 電話設置

十二月二日 クリスマス礼拝 中央公民館で祝会

礼拝後バプテスマ海江田寿子

新年聖会

四月六日 バプテスマ於大蔵川

正野暢之、下松光子、下松洋子、前田伊智子

海江田祝子、三苦静子、太田一美、貞昌子

五月十日 献堂式、四坪増築

九月十三日 増築感謝会

十一月一日 満25周年記念礼拝、聖餐式感謝会

十二月 クリスマス礼拝、祝会

新年聖会

三月三日 納骨堂定礎式

四月十八日 バプテスマ於会堂滴礼

鈴木通成、坪内不二子、野村美紀子

五月 ぶどうの木一号発行

八月八日 納骨堂献堂式

十二月 クリスマス礼拝祝会

一月 裏日本豪雪

三井三池鉱で炭塵爆発事故

十一月 ケネディ大統領暗殺さる

北九州市発足

四月 ミロのピナス海外初公開

六月 新潟大地震

東京オリンピック開催

東海道新幹線開業

一月 チャーチル死す

四一年

- 一、^懼る、なかれ、我汝をあがなえり、我汝の名を呼べり、汝はわがものなり
イザヤ43・1
- 二、我は全能の神なり
創17・1
- 三、われ汝を選べり
ヨハネ15・16

新年聖会

- 四月十一日 バプテスマ於大蔵川
海江田広子、海江田純夫、末永亮子
- 丸山清子、前田チヅ子
- 八月ぶどうの木二号発行
- 十一月一日 藤村社七師召天(九六才)
- 十二月十二日 バプテスマ 於大蔵川
花田俊恵、中島由紀子、平野恵子、竹田徳子
- 十二月 クリスマス礼拝、祝会

六月 敬老の日、体育の日制定

- 百円札廃止閣議決定
- 十二月 建国記念の日制定

四二年

- 一、主は私の牧者であつて、私には足りないことがない。
詩23・1
- 二、私はよい羊飼である。
ヨハネ10・1
- 三、私の羊は私の声に聞き従う。
ヨハネ10・27

新年聖会

- 二月 永大丸家庭集会 海江田宅
- 四月十日 バプテスマ於大蔵川
岩井美美子、榎本民子、鈴木静子、古家武文
宮崎泉
- 四月十日 折瀬鶴次郎牧師召天 告別式
- 九月 週報の大きさ変更半切(B5)となる
献堂二十周年礼拝聖餐式
- 十二月 クリスマス礼拝、祝会

六月 中東戦争

- 十月 吉田茂 国葬

四三年

- 一、汝ら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。
ヨハネ14・1
- 二、エホバはねたむ神なればなり 出エジプト34・14
- 三、まことにわが義しき右の手、なんじを支えん。
イザヤ41・10

新年聖会

- 一月より海老津家庭集会 現在に至る
- 四月十五日 バプテスマ 於大蔵川
前田新、井上文字子、上大田礼子、下松出美子
西理恵子、成木和子、国分幸子、野村恵子
- 五月十九日→二十一日 特別集会 松岡牧師
- 六月十八日 大阪家庭集会
- 十月 ぶどうの木三号発行
- 十二月 クリスマス礼拝、祝会

四月 黒人運動指導者「キング牧師」暗殺さる

- 六月 小笠原諸島日本に復帰
- 十勝沖地震、米軍機九大に墜落

四四年

一、主のいつくしみは絶えることがなく、その憐みは尽きることがない。
 哀歌 3・22

二、わたしは、初めてであり、わたしは終りであるわたしのほかに神はない。
 イザヤ 44・6

三、来て神のみわざを見よ。
 詩 66・5

四五年

一、我は汝らの神エホバなり。
 レビ 19・3

二、エホバ、エホバあわれみあり、めぐみとまことの大いなる神
 出エジプト 34・6

三、立ち帰りて静かにせば救いを得、おだやかにして依り頼まば力を得べし。
 イザヤ 30・15

四六年

一、今より我は主なり、わが手より救いだし得る者なし、我行わばだれか止とむる事を得んや。
 イザヤ 43・13

二、エホバは善なる者にして患難の時の要害なり。彼は己れにより頼む者をよく知りたまう。ナホム 1・7

三、汝ら静まりて我の神たるを知れ
 詩 46・10

新年聖会

四月十四日 バプテスマ於大蔵川
 小田善昭、貞一彦、正野サカエ、真島洋子
 後藤洋子、惣津純久子、水村静江、大田佳子

六月十日 住居表示変更

七月六日 献身式 鋼悠子

十月十日・十二日 特別集會 松岡牧師

十一月十六日 三十年記念感謝會

十月 ぶどうの木四号発号

十二月 クリスマス礼拝、祝會

新年聖会

三月二日 バプテスマ於大蔵川
 松山詔子、下山祥子、才田廣子、古村真理子
 大石和子

五月十五日・十七日 特別集會松岡牧師

六月二十九日 下松宅家庭集會
 (五四年六月二十五日迄)

九月 教会敷地購入一七九平米六五〇万円

十二月 クリスマス礼拝、祝會他
 ぶどうの木五号発行

新年聖会

二月十四日 河本小太郎召天満十年記念會

四月 榎本誠兄四国学院大学入学

四月十二日 バプテスマ於大蔵川
 森岡富栄、水村千恵子、安永倫子、国万嘉子
 国分恵子、岡本みどり、大場美智子、酒家真知子

十二月 ぶどうの木六号発行

一月

ニクソン大統領就任
 東大紛争、安田講堂騒乱

七月 米宇宙船アポロ11号人類初の月面着陸
 東名高速道路全通

三月

日本万国博開幕大阪市吹田
 赤軍派学生日航機「よと号」ハイジャック

六月

沖繩返還協定調印

九月

全日空機岩手上空で自衛隊機と衝突墜落
 天皇皇后ヨロツバ親遊旅行

- 一、見よ。我万物を新にせん。 黙21・5
- 二、エホバをおそる、者よ、エホバに依り頼め、エホバは彼らの助け、彼らの盾なり。 詩115・11
- 三、信仰なくば神を喜ばすこと能わず。 ヘブル11・6

- 一、わたしたちは、見るものではなく、見えないものに目を注ぐ。 2コリント4・18
- 二、見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くのである。 2コリント4・18
- 三、イエス・キリストをいつも思っていないさい。 2テモテ2・8

新年聖会

- 四月三日 バプテスマ 於大蔵川
- 榎本咲子、石丸日奈子、北川郁子、野口美加
- 東伊津子
- 五月二日 バプテスマ(滴礼)
- 長野サト
- ぶどうの木七号発行
- クリスマス礼拝、祝会、感謝会他

新年聖会

- 三月四日 献身式 伊規須太郎
- 四月一日 日本キリスト教団との包括関係を廃止し、同教団を離脱、宗教法人基督伝道隊八幡前田教会として新発足
- 四月二三日 バプテスマ於大蔵川
- 正野義雄、大口力
- 八月十六日 町上津役家庭集会開始大口宅
- 十月六日 柘植キヌ召天
- ぶどうの木八号発行
- クリスマス礼拝祝会、感謝会他

一月 グラム島で横井庄一元伍長発見

二月 冬季オリンピック札幌大会開催

三月 山陽新幹線大阪岡山開通

五月 「連合赤軍」軽井沢浅間山荘事件

沖繩復帰実現

八月 オリンピックミュンヘン大会

三月 米国ベトナム撤退

四月 振替休日法成立

十月 中東戦争、石油危機

四九年

一、おおよそ主にたより主を頼みとする人は幸である。

エレミヤ17・7

二、主は王となられた

詩96・10

三、愛には恐れがない。完全な愛は恐れを取り除く

1ヨハネ4・18

新年聖会

二月六日 末水弘海牧師召天、告別式八日

四月十五日 バプテスマ於大蔵川

五月十三日 牧師館地鎮祭

八月 同上完成

九月十六日 会堂解体撤去作業に入る

三十日 定礎式

十一月十五日 上棟式

四月ぶどうの木九号発行

クリスマス礼拝、祝会、感謝会他

五十年

一、神の言葉は皆真実である。神は彼により頼む者の盾である。

箴言30・5

二、汝ら心を騒がすな。神を信じまた我を信ぜよ。

ヨハネ14・1

三、主に感謝せよ、主は恵み深く、そのいつくしみは、とこしえに絶えることがない。

詩118・1

五十一年

一、愛の中におそれある事なし。全き愛はおそれを除く。

1ヨハネ4・18

二、誰かよく世に勝たん。イエスを神の子と信する者に非ずや

1ヨハネ5・5

三、エホバをまち望め、雄々しかれ、汝の心を堅うせよ。必ずやエホバをまち望め。

詩27・14

新年聖会

三月二日 新築落成式、感謝会

三月三日 バプテスマ於大蔵川

野村仰一、江口多美恵、畠山三代子

ぶどうの木十号発行

クリスマス礼拝、祝会、感謝会他

一月 新年聖会

四月十九日 バプテスマ 於大蔵川

清川征洋、中村栄之助、綾部時男、小南房子

太田久美、野口加代

十月 戸畑開拓伝道開始

日曜 十五時日曜学校 十九時半伝道会

木曜 十九時半伝道会

十二月 クリスマス礼拝、祝会、感謝会他

三月 ルバング島で小野田元少尉発見

五月 マーメイド三号世界一周成功

日本女性隊マナスル登頂

八月 三菱重工本社爆破事件

三月 山陽新幹線博多迄開通

四月 蔣介石死す(八七才)

天皇、皇后両陛下御訪米

ロッキード事件起きる

ソ連のミグ25函館空港に強行着陸

五二年

一、おそる、なかれたゞ信ぜよ。 マルコ5・36
 二、おそるなかれ、我汝と共にあり、驚くなかれ我は汝の神なり。 イザヤ41・10
 三、我汝を強くせん、誠に汝を助けん、まことにわが義しき右の手汝を支えん。 イザヤ41・10

五三年

一、みよ我万物を新にせん 黙21・5
 二、我みずから汝と共に行くべし。我汝をして安らかにらしめん。 出エジプト33・14
 三、なんじ、もし信ぜば神の栄を見るべし。 ヨハネ11・40

五四年

一、おそる、なかれ只信ぜよ。 マルコ5・36
 二、我限りなき愛をもて汝を愛せり。故に我絶えず汝を恵むなり。 エレミヤ31・3
 三、汝は我に従え。 ヨハネ21・22

五五年

一、汝の足よりくつをぬぐべし。汝が立つ所は聖き地なればなり。 出エジプト3・5
 二、汝我に呼び求めよ。我汝に答えん。又汝が知らざる大いなる事と隠れたる事とを汝に示さん。 エレミヤ33・3
 三、我そこにて汝らに会い、なんじと物言うべし 出エジプト29・42

新年聖会

四月十一日 バプテスマ 於大蔵川
 川越正、川越静江、青木千鶴子、菅原多美子
 松永有美子、筑山淳子、吉田智子
 クリスマス礼拝、祝会、感謝会他

新年聖会

ぶどうの木十号発行
 六月 先生御夫妻アメリカ、カナダ旅行
 クリスマス礼拝、祝会他、年末感謝会

新年聖会

四月二二日 バプテスマ 於大蔵川、
 野津周正、柁木文男、柁木すみ子、松山智昭
 島崎博子、廣瀬和美、有元郁子、工藤菜通子
 塩崎恵美子

五月十四日から先生アメリカ、カナダ出張
 クリスマス礼拝、祝会、年末感謝会

新年聖会

四月七日 バプテスマ 於大蔵川
 岩井誠司、江藤矩彦、小田みどり
 古野とみ子、原田シゲノ、石田秀子
 三月七日から牧師御夫妻ヨーロッパ旅行
 十月二日―三日 伝道会九州聖会
 岩井、正木、伊藤先生
 クリスマス礼拝、祝会他 年末感謝会

北海道の有珠山32年ぶり噴火

日本赤軍日航機ハイジャック、政府超法規的措施で犯人グループ釈放

新東京国際空港開港

円急騰、初の二〇〇円突破
 伊豆大島近海大地震

元号法案成立

ソ連アフガニスタン政府に介入各国非難
 韓国朴大統領暗殺さる
 黒崎そごう閉店

イエスの方舟事件

モスクワオリンピック開幕 西側不参加
 新宿西口でバス放火事件

五六年

一、娘よ、開け、目を注げ、なんじの耳を傾けよ。汝の
民と汝が父の家とを忘れよ。 詩 45・10

二、我らの尚亡びざるは、エホバのいつくしみにより、
その憐みの尽きざるによる。 哀歌 3・22

三、視よ。われ戸の外に立ちて叩く 黙 3・20

五七年

一、みよ、我万物を新にせん。 黙 21・5

二、我行わば、誰か止どむることを得んやイザヤ 43・13

三、義人は信仰によりて生くべし へブル 10・38

五八年

一、みよ、今は恵の時みよ今は救の日なり。

二、今はエホバを求むべき時なり。 2コリント 6・2

三、今は、エホバの働き給うべき時なり。 ホセア 10・12

詩 119・126

五九年

一、われわれの神に帰れ。 イザヤ 55・7

二、主は豊かにゆるしを与えられる。 イザヤ 55・7

三、恐れてはならない。わたしはあなたと共にいる。 イザヤ 41・10

新年聖会

四月二十日 バプテスマ 於大蔵川

西岡準人、西岡ゆり、河本潔子、太田香代子

川原米子、大坪保之

ぶどうの木十二号発行

クリスマス礼拝祝会他 年末感謝会

新年聖会

四月十八日 バプテスマ 於大蔵川

久保田宮子、河本恵、渡辺由美子、小松瑠枝

小田裕江

ぶどうの木十三号発行

クリスマス礼拝、祝会他 年末感謝会

新年聖会

三月二十八日 バプテスマ 於大蔵川

榎本誠、榎本ケイ子、松山直典

四月三日 米寿祝 河本かつ、新原とみの、丸橋幸市

クリスマス礼拝、祝会他 年末感謝会

新年聖会

四月九日 バプテスマ 於大蔵川

松尾博子、正岡晶子、石丸到、石丸道子

ぶどうの木十四号発行

十月 榎本牧師入院（十一月十日退院）

クリスマス礼拝、祝会他 年末感謝会

レーガン大統領就任

韓国全斗煥大統領就任

中国残留孤児初の正式来日

ホテルニュージャパン火災

日航機羽田で事故

日本海中部地震

大韓航空機墜さる

東京アイズニーランド開園

江崎グリコ社長自宅から誘拐さる

ロスアンゼルスオリンピッククン連など不参加

六十年

- 一、私達の国籍は天にある
ピリピ3・20
- 二、そこから救主、主イエスキリストの来られるのをわたしたちは待ち望んでいる。
ピリピ3・20
- 三、彼は万物をご自分に従わせ得る力の働きによって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光の体と同じかたちに変えて下さるのである。
ピリピ3・21

六一年

- 一、わたしたちは、見えるものによらないで、信仰によって歩いているのである。
2コリント5・7
- 二、わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それ故わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた。
エレミヤ31・3
- 三、見よ、神はわが救である。わたしは信頼して恐れることはない。
イザヤ12・2

六二年

- 一、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである。
2コリント3・18
- 二、光の中を歩くならば、み子イエスの血が、すべての罪からわたしたちを、きよめるのである。
1ヨハネ1・7
- 三、あなたの信仰があなたを救ったのです。
マタイ9・22

新年聖会

- 三月三十一日 榎本和義(元) 文子(姉) 献身式
- 四月十五日 バプテスマ 於大蔵川
下川泰広、水村光義、塚本敏子
- ぶどうの木十五号発行
- クリスマス礼拝、祝会他 年末感謝会

新年聖会

- 三月二三日 按手礼式 伊規須太郎
- 十月十九日 バプテスマ 於大蔵川
園田幸子、河本真理子
- クリスマス礼拝、祝会他 年末感謝会
- 十二月二十九日 榎本牧師肺炎入院

新年聖会休会

- 二月十五日 榎本牧師退院
- 四月五日 水村光義献身式
- 三月ぶどうの木十六号発行
- 十月二一日 バプテスマ 三好ツル(病床満礼)
- クリスマス礼拝、祝会他 年末感謝会

N T T、日本たばこ産業会社発足

豊田商事など悪徳商法横行

日航ジャンボ機群馬県御巣山に墜落五二〇人死亡

社会党に初の女性党首(土井たか子)

大島三原山噴火、住民疎開騒ぎ

チャールズ英皇太子とダイアナ妃来日

国鉄の分割、民営化スタート

六三年

一、なんじら心を驕がすな、神を信じ、また我を信ぜよ

ヨハネ 14・1

二、わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える。

エレミヤ 33・3

三、子たちよ、キリストのうちにとどまっていなさい。

1ヨハネ 2・28

平成元年

一、わたしは神、あなたの神である。

詩 50・7

二、見よ、わたしは新しいことをなす。

イザヤ 43・19

三、主を待ち望め、強くかつ、雄々しくあれ。

詩 27・14

一月 新年聖会

四月 水村修養生関西聖書学校入学

五月二三日 バプテスマ 於大蔵川

長尾千枝子、木原佳子、田中みずよ

十二月 ぶどうの木十七号発行

クリスマス礼拝、祝会他 年末感謝会

新年聖会

五月三日 バプテスマ 於大蔵川

小仲幸子

十一月三日 五十周年記念感謝会

青函トンネル開通

瀬戸大橋開業

リクルート事件おこる

ソウルオリンピック開幕、史上最高の100ヶ国参加

昭和天皇崩御(八七才)

皇太子明仁親王踐祚「平成」と改元

消費税実施

中国動乱

天安門事件発生

信徒及び求道者並びに関係者名簿

			*	*林	*	*	*林	*	*林	*林	*	林	*林	*花					
														田					
麗子	まゆ	大輔	悦子	伊左夫	常喜	一孝	由記子	正二郎	信之	裕子	信一	磨璃子	聖悟	祐輔	恵子	市裕	明美	宏	嗣文
*	*藤掛	[ふ]		*	*東			*	*廣田	*廣瀬		*東	[ひ]				原田	*	*原田
一美	信夫			員子	俊郎	史子	京一	千穂子	壽	和美	琢二	伊津子			沙也加	裕子	真一	シゲノ	駒一郎
*	*丸山	松崎	*松崎	*松尾	*真島	*正岡	*前田		*前田	*前田	[ま]		古庄		藤原	*藤本	*藤村		
恵美子	雪夫	正道	ひろ子	博子	洋子	晶子	千鶴子	忍	伊智子	新			幸子	悦子	重樹	信子	有美子	盾	斉
			門司澄子	*森岡富栄	*本山裕江	[も]		村田克典	[む]		*水村光義	*	水村耕一	*	*三好喜代市	[み]			松山文造
*渡辺由美子	*渡辺明美	[わ]				*李	*李	[り]		*吉田智子		*吉浦高潮	[よ]		百合野寿朗	[ゆ]			*山下忠良
				サムエル	ハンナ	文珠	龍基												

戸畑教会

* 伊規須 太郎

* 泰子

* 岩井 芙美子

* 岩井 茂樹

* 岩井 誠司

* 内田 松枝

* 緒方 昌隆

* とみ子

* 久保田 宮子

辰雄

万二

* 杉山 三代子

* 瀬野 節子

大 楽 進 助

嶋 山 正 三

* 英子

* 義 宏

* 信

* 平 田 喜 代

* 松 山 智 昭

* 直 典

本 末 伸 代

和 田 匡 孝

結ばれた方々の名簿

結ばれた方々の名簿

結婚年月日	新郎	新婦
昭和二十三年 四月十五日	河本 実	斉藤 照子
昭和二十五年 十月十五日	野村 末義	新原美恵子
昭和二十六年 三月十八日	倉本 修	森 恵美子
昭和二十七年 三月二三日	畠山 省三	藤本 英子
昭和二十九年 十二月二八日	高木 敏夫	左藤ツルエ
五月五日	廣田 壽	加来千穂子
十一月二一日	志岐 成久	楠 治
十一月二九日	大口 種義	筑山 和子
昭和三十五年 十月十六日	伊規須太郎	東 泰子
昭和三十六年 一月八日	花田 宏	古賀 明美
昭和三十七年 四月二五日	河本 信生	太田 米子
十一月四日	田中 久稔	城戸 善子
昭和三十八年 二月十日	海江田道夫	中森 博子

昭和三十九年 十一月六日	高橋 英雄	萩原 恵子 (於横浜喜田川牧師司式)
昭和三十九年 一月九日	早田 勝彦	桑原 壽子
昭和三十九年 三月二九日	阿部 健吾	今永 亨子
昭和三十九年 四月二六日	鈴木 通成	佐藤 和子 (杵築教会)
昭和四十年 六月十六日	山下 右一	西原 和子
昭和四十年 三月十二日	佐竹 義隆	海江田祝子
昭和四十年 四月四日	坪内 末徳	下川 悦子
昭和四十年 五月十六日	池田 清風	上脇ふじ子
昭和四十年 三月十九日	高橋 悦雄	廣瀬 操
昭和四十年 十月十六日	下川 泰広	松藤 敏子
昭和四十年 十月十六日	吉浦 高潮	下松 薫子
昭和四十年 十一月六日	渡ヶ次政夫	石津 栄子
昭和四十二年 十月三十日	林 信一	三苦 静子
昭和四十二年 五月七日	正野 真宏	鈴木 裕子
昭和四十三年 二月二九日	林 正二郎	熊谷百合子
昭和四十三年 三月十日	三好 正善	宮崎由記子
昭和四十三年 五月二六日	尼田 隆己	和泉 翠
昭和四十三年 十二月九日	高橋 富雄	須々木千代
		川越 照子

昭和四四年	二月二三日	榎本 俣雄	中島 邦子	昭和四八年	四月二日	飯田 恵三	野村美紀子
昭和四五年	三月二五日	吉永 篤司	貞 昌子 (東八幡バプテスト教会)	八月二三日	西岡 隼人	高木 ゆり	高木 ゆり
	三月二六日	江口 勝芳	末永 亮子 (岡山岡南教会)	十二月三日	中村栄之助	今本 光恵	今本 光恵
	三月三十日	正野 隆士	藤原としの (岡山岡南教会)	四月一日	清川 征洋	松山 詔子	松山 詔子
	六月四日	長島 流石	太田 佳子	四月二九日	調 邦行	佐々木典子	佐々木典子
	六月十九日	李 竜基	西原 文江 (於トロント)	五月三日	一本木清文	片山 和子	片山 和子
	十月二日	伊藤 修己	緒方 祐子	六月十日	上島 南明	野村 恵子	野村 恵子
	十月三日	前田 新	田嶋 和美	昭和五十年	三月二三日	正野 暢之	調 悠子
昭和四六年	九月十二日	榎本 和義	阿部 文子	四月二四日	笹木 茂	野村真理子	野村真理子
	十月十三日	榎本 誠	小林ケイ子	十一月十六日	富田 利治	奥野 信子	奥野 信子
	十一月十四日	石丸 勇	原田日奈子	昭和五三年	五月二日	林 市裕	筑山 恵子 (司式榎本牧師) (高岡市 富士観ホテル)
昭和四七年	四月二日	花倉 芳広	下松 洋子	十月八日	谷口 秀輔	下松由美子	下松由美子 (福岡大濠公園教会)
	四月五日	高橋佳一郎	渡瀬美紀子 (青堀教会)	昭和五四年	六月三日	渡辺 正幸	吉田あけみ
	四月七日	小田 善昭	榎本 咲子	十一月二三日	植木 一三	高岡 愛子	高岡 愛子
	五月十四日	藤掛 信夫	大田 一美 (福岡大濠公園教会)	昭和五五年	五月五日	小仲 昇	廣田 章子
	五月二八日	安東 篤良	安永 倫子	十二月一日	栢木 文男	鳴山サナミ	鳴山サナミ
	十月七日	鶴飼 芳光	斉藤 英子 (能勢川キリスト教会)				
	十二月三日	貞 一彦	太田サユリ				

昭和五六年	一月十五日	杉山 宣夫	畠山三代子
	四月四日	野村 仰一	横井 美保
	五月四日	川越 正	水村千恵子
	十月十日	田中 征一	大石 和子
昭和五七年	一月二四日	奥野 俊二	水村 恵子
	四月十日	鳥越 良典	太田 久美
	十月二十日	阿部 真一	原田 裕子
	十一月十日	嶋津 和彦	林 留美
	十一月十四日	砥上 浩一	筑上 淳子
昭和五八年	三月二一日	岩井 茂樹	西 享子
	四月十七日	上田 俊英	西山 直美
	十一月三日	堤 善彦	吉田 瑞穂
	十二月十日	今井 高司	海江田寿子
昭和六十年	六月二日	津留崎 真	迫田 弘美
昭和六一年	一月十五日	大口 力	井上 英子
	五月十八日	海江田祐二	北谷 順子
昭和六三年	五月二九日	本山 悟	小田 裕江

(厚木上教会)

(福岡大濠公園教会)

平成元年	五月二一日	岩井 誠司	白岩佳代
	九月二三日	井上 泰裕	
			瀬戸烏聡子

(戸畑教会)

さきに召天された方々の名簿

さきまに召天された方々の名簿

召天年月日	告別式	召天者名・記事
昭和十六年		藤本 春市
昭和二十年	六月五日	原 倭子
昭和二十三年	二月二日	萩原 憲三
	二月三日	榎本 豊
	十一月十四日	榎本 恵
昭和二十六年		西原 保(兄)
昭和三十一年	五月二三日	倉内
昭和三十一年	五月六日	西原(父)
昭和三十四年	八月二一日	伊規須藤太(宗像)
	十月十八日	筑山 直
昭和三十五年	四月十五日	加藤 吉十(堺市 洪寺)
	六月九日	新原シゲノ
	十二月二日	能美 理壯
昭和三十六年	二月四日	河本小太郎
	二月六日	

昭和三十八年	三月十日	丘邑 てつ
	四月十二日	三苦又太郎
昭和四十年	四月二十四日	高橋 唯市
	四月二六日	
	一月十日	熊谷久次郎
	四月四日	松村行司良
	九月九日	新原岩太郎
	九月十日	永谷 悦子
	十一月十九日	記念会
	十一月二二日	
昭和四十二年	二月三日	伊規須コト
	二月五日	
昭和四十三年	四月二日	鈴木三千穂
	五月四日	海江田憲法
昭和四十五年	五月六日	海江田ユキ
昭和四十七年	十一月三日	十一月五日
	八月十四日	酒家真知子
	八月十七日	丸橋サトヨ
	九月三日	林 知夫
	九月四日	
	九月二十日	
	十月一日	
昭和四十八年	十月二日	長野 サト(八七才)
昭和四十九年	三月五日	秦貞右エ門
昭和五十一年		

昭和五二年	十二月二十日	六月二四日	丸橋 昭二 加藤 操 (堺市浜寺聖母教会)
昭和五三年	十二月八日		古野栄之助 (戸畑伝道所)
昭和五三年	十二月十五日		西原 福代 (於トロント)
昭和五四年	九月八日	九月九日	島崎美知子 (七九才)
昭和五四年	二月十五日	二月十七日	大田 こう (九三才)
昭和五四年	三月二一日	三月二二日	岩隈 勝
昭和五六年	七月一日	七月二日	島崎 稔
昭和五六年	十月十三日	十月十五日	小田 又雄
昭和五七年	十月二日	十月四日	高木 芳夫
昭和五七年	一月二日	一月四日	栢木 四男
昭和五七年	一月五日	一月十五日	森岡 勝
昭和五八年	八月十六日	八月十八日	高橋 悦雄
昭和五八年	五月十一日	五月十二日	長尾 正博
昭和五九年	七月二十日	七月二二日	林 ハルエ
昭和五九年	六月二日		大野季太郎 (大阪九条教会)
昭和五九年	九月十七日	九月十八日	新原トミノ
昭和六十年	二月二十日	二月二四日	海江田典夫

昭和六一年	七月八日	八月十三日	正岡平四郎 (高槻)
昭和六一年	八月十二日		河本 かつ
昭和六二年	一月二十日	一月二二日	丸橋 幸市
昭和六二年	三月二七日	三月二九日	正野 義雄
昭和六二年	六月二十日		柴田 しか (津屋崎)
昭和六二年	十二月十九日	一二月二十日	安部音五郎
昭和六三年	五月十七日	五月十九日	園田 時春
昭和六三年	十月二四日	十月二六日	川越 栄
昭和六三年	二月二十日		磯部 静子
昭和六三年	六月九日	六月十日	中島 丈一
昭和六三年	八月二七日	八月二八日	前田 幸江
平成元年	四月一九日	四月二一日	大口 種義
平成元年	三月十四日		城 きみ (九六才)
平成二年	二月二八日		大津留幸子

あとがき

。おまたせいたしました。記念の日から半年余、ようやくみなさんのお手許に記念誌をお届けいたします。貴重なお証と資料をたくさんお寄せいただき、ありがとうございます。ありがとうございました。感謝いたします。

。「聖言に立って、聖霊の導きを祈り、親しみ易い記念誌に」をモットーに編集させていただきました。御名が崇められますように。

。記念誌は二冊に分け、記念礼拝とお証を(一)に、五〇年の歩みと年表等の資料を(二)といたしました。なるべく原稿に忠実にと心がけましたが、編集の都合で一部割愛させていただきます。ご了承ください。

。お証の掲載は、アイウエオ順とし項目の分類は明確な区分ではありません。感謝会の記録は遠方からご出席くださった方のみとさせていただきます。

。年表の初めの頃に空白が目立ちます。古い記録の喪失もあり、当時を知る方が少なくなったこともありますが、先生は「すべてのことは天に記されている」といわれ、御国を望む信仰に立たされてまとめを進めました。

。教会の歩みを振りかえるとき、忘れてならないのが先に召された聖徒達の信仰の足跡であります。「思い出の人びと」を記していただき、また「ぶどうの木」から遺稿を転載して偲びました。

。表紙の題字は野村末義兄に、カットは水村兄、小松瑞枝姉、野村兄、木原姉にひと筆、ひと筆心をこめて書いていただきました。

。「燃ゆる柴」が更に八〇年、一〇〇年に向け、記念の塚として信仰が整えられるよう祈ります。

集 会 案 内

	(定期)			
	日曜学校	日曜日	午前	八時三〇分
	聖日礼拝	日曜日	午前一〇時〇〇分	
	神癒会	日曜日	礼拝	終了直後
	伝道集会	日曜日	午後	七時三〇分
	祈禱会	水曜日	午後	七時三〇分
	木曜会	木曜日	午前一〇時〇〇分	
	禱告会	金曜日	午後	七時三〇分
	海老津集会	水曜日	午前一〇時〇〇分	
	新年聖会	元日	二日	三日
	(不定期)			(朝昼夜)
	信徒会	エステル会		(婦人会)
	家族会	サフラン会		(青年会)
	(礼典)			
	洗礼式	聖餐式		
	(行事)			
献児式	幼児祝福式	成人祝福式		

「燃ゆる柴」創立五十年誌(一)

発行 一九九〇年六月三〇日

発行者 北九州市八幡東区前田一丁目一〇―三

基督伝道隊 八幡前田教会

牧師 榎本利三郎

編集委員

総括 広田 寿

原稿 正野真宏(事務局)

原田駒一郎

大田邦子

週報 野村末義

高木ツルエ

野村美恵子

年表 筑山文彦

写真 林正二郎(事務局)

名簿 河本信生

印刷製本

吉田印刷株式会社

北九州市若松区浜町一丁目一九―一